
ONE PIECEの世界で生きて行きます！！

亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECEの世界で生きて行きます！！

【著者名】

Z3234Z

【あらすじ】

普通の女子高生だったのに、神様の流れ弾によってワンピースの世界で転生することになった。さてさてこの子の運命やいかに！！この作品は作者の暇つぶしによって作られたものです。更新が不定なので注意してください。

プロローグ

あ～、何でこんなことになつたんだろうね
いま、わたしは、自転車にはねられ、なんかで~~~~~つか
い火の玉飛んできて丸焦げです w
なんか悪いことしました？

こんな平凡すぎる高校生がなんかしましたか？
神がいるのならわけを聴きたい。

(「あんよお」)

あらへ、いつの間にか真っ白な空間にいるな。
頭の中で声がするし・・・

(わしゃ、神様といわれるものですな。)

つて・・・神様！？

なんでそんなものがここに

(わしがここにいたりだめかね？)

人の心を読んだ。 もう

(きもいとはなんじや、 もいとは)

いや～、そんなことないでもいいんですけど、何で私はこんな運命
に？

(いや～たまたま、わしが暇つぶしに火をおこしてな、その火が手

(が滑つてしまつた)

ふつてきたと

(そのとつ)

つて、あほか!!

(すまん、その代わりといつたらなんだが、他の世界に転送 + 五つ願いをかなえてやる)

おお、神様すばら

(ビリの世界でも、どんな願いでもよい)

んじゃあ

ワンピースの世界で

1つ、世界一美人

二つ、ペチトとして龍をつける、ちなみに額に十字架いれてその中に普段は入っている

3つ、霸王色の霸氣

4つ、魔法が使える

5つ、運動神経、頭のよさ、回復力が人の5000倍
5歳くらいで転送してね!

(おもったより、ここにすばらここといこよるな)

そつとじつけ

(その前に、お前のあつひの世界の名前を決めり、)

んじゅあシユルティで

(はこよ、じゅあ。転送)

ども

あっけなく行きましたね。いいは、ああ、ワンピースの世界か・・・
ビックだわ、つてか着地したとき痛かったな。

「お、おきたのか。」

いいは、船の上?でもちつわーー

「おれは、フィッシュヤータイガー。おおえは?」

あ、そう。大物なのね。

「わたしは、ショルティ。で、ビックに向かってこるんですか?」
の
船は。

「おうるか?」

「こいえ行く当ても無こので」

「あ、これはうれしい。だって私この人とマリンフォードで奴隸解放したいモン

あ、龍の名前がひじみわ。清流でいいか。

「今奴隸解放のため、マリンフォードへ、向かっている」

「連れて行つた下さー」

「お前は未だ子供だらう?」

「あー、そうか、そうだったね。私は五歳の女の子!でも、わたしには龍というおくれのがある!!」

「龍を出せます。」

「うそを言つのではない。」

出でひづか

「出したら連れて行つてくれますか?」

「ああ。いいぞ。」

えーと、呪文は・・・
勝手を作るか・・・

「あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、我の
前に現れよーー!」

光が額の十字架から出で、だんだん龍の形になつていぐ。

でた~。

なまえのとうり青色で、くらくらの青い眼で、額に私と同じ十字架

がある！

でも、ちつちつ！

「本当のようだな。」

「連れて行った下さい」

「わかった。しんでも知らないぞ。」

「しません。」

「ははは

もう。

マリージョアにつきました。

いま、レッドラインの前です。

さあ、私は清流に乗って、フィッシュナーさんは、素手でいきますか。
ちなみに清流に「おおきくなあれ」といってたら、大きくなりました。一般的な龍ぐらいの大きさに。

ズザザザザザ

はえ～、フィッシュナーさん。

さすが魚人族。一時間ほど経過して、つきましたね。

「俺は奴隸を解放する。おまえは邪魔になるだけだ。それ、しまつて、隠れときなさい」

いがいに優しい（？）のかな？

「私は天竜人を倒しますね」

「おいつ！」

「んじや～あ～り～が～と～う～ざ～い～ま～し～た～。」

幼稚園児みたい言つて去つて行く私。

天竜人現れました。そして、堂々と横切る

天1「おい無礼者。私の前を横切るな！！殺せ。」

「うざつ」

天1「ぶざやあ

今のはただの回し蹴り。しんだね。ふ、ざまあ
見たいな感じで悪そうなのを次々と倒していくわたし
奴隸はかぎ作つて渡して開放
立派にお掃除してあるでしょ？

あ、海兵さんもね。

ちゃんと致命傷になるくらいのキズ負わせといったから。

大丈夫！抜かりはなし！！

あれ？あこの天につれられてるのつて（天は、天竜人の略）
ハンコックさん？

「ふふふふ」

助けて恩を売つておいつ

sideハンコック

もついやだ。

ここに居たくない。

だれか、助けて！！

「お～い、そこの天竜人というカス！！」

「このこ！…なんてことを…！」

「ああ～ん？ころせ…！」

「はあ、分かつてないね！」

ふざや

あ、警備の人気がしんだ

「ひつ」

「奴隸さ～ん。これで逃げて…！」

もらつたのは、鍵。

「あなたは…！」

ふいに声をかけてしまつた。まだ、五歳くらいの女の子に向でん
なのが倒せるの？

「あたし？あたしは、ショルティー！弱気ものをいじめるひとを刈る
のが趣味！」

「あ、ありがとう」

「どういたしまして。」

あのちいさな子に助けられて正直しつくづこない。でも私は忘れない。シェルティ、あなたのことを

side シルティ

あのねえ

「海兵サンよ。そんなに五歳の女の子をいじめたいの? よつてたかつて切りかかってきて。まあ、斬られたつてどつてこと無いんですけど。よけるし。」

『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』

「ええい。わしが行く。」

「 」『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』『 』

え、あの。女の子相手に大将つて無いんじゃないですか?

「うえええええええええええええん。かいへいさんがいじめるよ

』

必殺! 嘘泣!

「シユルティ、そんなこと出来ないのに〜助けてくれたおねえちゃんのまねしただけなのに〜」

そして、いいわけ! -

「そうかそうか。つて、だまされんぞ! -」

ちつ

「しょうがないですねえ。」

「いま思いついた技出しますか!!」

「凍える涙!!」

吹雪を起こす技だよ〜ん

「でいやあ〜」

切りかかってくる

「熱く燃える心!!」

火の玉を投げる技

「はつ---！」

斬りよつた。

「ば、化け物がある~」「お前のまづだろーー!」

「鋭い眼」

雷を落とす業

「うわあ

あつたつた！！

「速い翼」

竜巻です。

「凍える涙、熱く燃える心、鋭い眼、早い翼それは人間が持つているなり！…」

光る龍を召喚して相手に噛み付かせる技です。

はい、大将はからだ
私は魔力が限界です。
ビーしましょビーしましょ

「逃げるが勝ち！…」

にげる～にげる～わたしは～まわり～のもの破壊しつづけ

あ、奴隸さんたち各自船に乗つて逃げてるしー。
わたしは～あ～～～あれにしようじ。

わたしはレッドライインからその船に飛び降りた。

「やあ

お、なんとまあ蛇姫さんとの「ジヤーないですか。」にょん婆も乗つてるし。

「あなたは！」
「どうしたの姉様」
「だれこいつ！ はつーまさか政府の回り物？」
「だれじや！」やつは

口々に言ご寄つて。

「わたしは、シェルティ。この事件の張本人であり、この黒髪の女人を助けた人！」

「「「はあ？」」「
「そうじや」

蛇姫さんだけうなずく

「「「あ、姉様を助けてくれて有難う御座いました」」
「うん」
「あ、あの！！」
「なに？ 縁の髪の人」
「あなた年はいくつですか？」
「5歳」
「「「ええええええええええええ」」」

ああ。おどろいてるおどろいてる

普通の反応有難う

大将さんしてくれなかつたもんね

普通に斬るし、まあ、もう死んでると思つけどね

そして蛇姫たちは思う

((((ショルティって、なんか常識超えてる)))

まあ、転生したし
てか早く自分の姿みたいないな～

ハンコック「シェルティつて今からどこ行くのじゃ？」

二〇七

「…………とおーな」「…………」

格好隠すものあつたらくれないかな?」
ハノコツフ「送らば、どうもいいの?」

「大丈夫大丈夫。」

シェルティ「もらえるかな」

「アン、いいが、お主何者じき？」

転生したなんていえないし。マントツてどんなんだらうか・・

シェルティ「マントってどんなものなの?」

ニヨン婆「これによ

きれい。真っ白で裾や、袖口に雪の結晶の模様が入っている。

「シエルティ「これほしいな。」

ニヨン婆「まあいいが。」

シェルティ「やつたあーー！」

よ。きらりたし、着て、そしてフーシャ村にゆく。」

「シルティーマンとあります。んじや、またじいか庄屋おひなさん
「ああ、清流に乗ってござ。フーシャ村へ！」

「ああ、清流に乗ってござ。フーシャ村へ！」

プロローグ（後書き）

えつですね。めひやくひやですね。この文。あとキャラが崩れの
かもしれないのにご注意ください。
でも、私を見捨てないで～

フーシャ村について

s.i.d.eシールティ

今ね、海の上を清流で飛んでるよ~
いや~はやく私の姿みたいな~

ついたね。

うん。名前のとおり風車がいっぱいあるよ。

「お~い。Hース!! 勝負しろーー!」

「だめだ。」

「なんで」

「もう、一日の勝負する数すぎただろ?」

お~お~やつてますね。

あいつら手なずけるか・・・

「おい！ その人たちーー！」

۱۱۷

「ちょっと。宿屋探してるんだけど・・・」

「それなら「おー！ルフィー！」。」「

ふふ。
なかいいね。

「お前誰だ？」

「私はシェルティ！！あなた達は？」

俺はエース

一 僕は川づけ

卷之三

さすが義理兄弟ハモつてゐ

詩經卷之十一

「とにかく前半こもるんだって

元
見渡しやうの手本一か。

「普通の女の子だよ？」

勘が鋭いな。このヒースさんは、さすが「ゴールドロジャー」の息子……！

「だったらなんで龍から降りてきた。」

いちいち鋭いな。えーと、こうゆうときは。スルー

「それよりも宿屋つてどー?」
「宿屋はねえ」「

・・・

宿屋へりこあるでしょ。

んじゅあ、ここや、もひ。こんなのがてにしなければよかつた。

「んじゅ。情報有難うね。」

「おこー待てーーー。」

おこおー

ここまほつといふ。Hースさん

「なにかな

「教えてもらつてされは無いだろ。情報料払え。」

Hースつひこんなキャラだつたっけ?
まあこいこや。はしつて逃げよつ。

「んじゅ。せじ

ズダダダダ

土けむりをたてながら軽く走った。

フーシャ村らしきものが見えてきたぞ。
そこのバーみたいなどこに入つてみよう

「いらっしゃい！」

美人な人がいますね。

「あら？ 見かけない顔だね。」

「はい、えつと、とおおおおおおおおおおい所から流されてここに流れ着いたんですけど。ここってどこですか？」

「フーシャ村よ。」

「あの」

「なに？」

「私、新聞見たいんですが・・・」

「えつ・・・いいよ。」

「そうだよね」

「おかしいよね

こんな小さな子が新聞見たいなんて・・・
とかおもいつつ新聞めぐると

マリンフォードの奴隸解放事件！！

そうせい5537人の天竜人を殺し奴隸を解放した。

フイッシャー

タイガーとシェルティ。

お～お～

も～ひ～んなとこまで情報きてるよ
懸賞金とかアンのかな？

「おねえさん。賞金首の紙みしてくれる?..」

「ええ、新聞は読み終わったの?..」

「うん!..」

「そう」

渡してくれた。賞金首の乗った紙。

違和感なんて沸かないのかしら?

まあ都合がいいから言わないけどね・
え～っとわたしのあるかな?

・・・・・ 粉雪のシールティ懸賞金6億ベリー・・・・・

海軍バカかしら?

こんな子供一人にこんなけかける?普通

「お姉さん。」

「なに?」

「この子どうおもつ?..」

「どの?..」

「粉雪のシールティさん

「そうね。こわいかしら。」

「そうなんだ。」

怖いんだね、やつぱ。

そりゃそうか。

こんな子供がたくさんの人を殺したなんて・・・
ばらしてみようかしら?

「私、鏡みたいの。もし、このシェルティ見たいな顔だったら怖い
もん!」

「わかったわ。じつちにきて。」

「うん」

さあ、どんな顔なのかな?

「うーんよ。」

「おねえさん。かぎしめて。誰もこれなによつて、もしシェルティ
だつたら大変だもん!知られたくないし。」

「わかつたよ。」

さあ、マントをとりますか。

「お姉さん。私の名前はシェルティだよ。」

「!?

そりや、びっくりするよねえ
まあいいか

「その証拠に・・・ほらね。」

「.....」

ビックリして声も出ないってか。
まあ、しょうがないけどさ。

「私をどう使用つての？」

「いあいあ。よんなつもりはないよ。ほんとにどんな顔のかみた
かつただけだし・・・」

「信用できなーいわ」

「なら、縄で縛つてもいいよ。信じてくれるなら。」

縄なんてどうしたことないし

「わかった。信じる。」

「うん。ありがとう。」

さて、どんな顔なのかな？

・・・

え、えーっと

髪の毛が縄みたいに白くって腰まであって、眼がルビーみたいでく
りくりで、すこじぽんくっぽい白い肌
です。

うーん。かわいいのかな？

「ありがとう。自分の顔が良くなかった。」

「こりゃフードかぶらなきやだめだね。」

「ねえ、シェルティちゃん」

「ん？」

「ルフィー達と手合わせしてくれるかな？」

「なんで？」

「あの子達を誰にも倒されないよつと強くしてほしこの。」

「わかりました。」

たぶんあいつら私を追いかけてきてると思おつかい。

「よんぐるね。」

「はい！」

「エス！ ル」ナイ＝！！ おいて！」

卷之三

えええええええ
よんな簡単にくんの?

十一、前略

「ああ～、お母さん」

はあいし

「 「 なんでーーー！」

「わたしは賞金首だし」

「賃金道と併合をせしたいでしょ？」

፳፻፲፭

「んじゃ決定ね」

さあ、お遊び開始～

フーシャ村について（後書き）

キャラが崩れる～

ガラガラガッシャーン

ああ～こんな私と小説ですが見捨てないでね

対決

side シュルティ

「あ～そういえば、こいつら最初手なづけよつと黙つたんだっけ？ま、いか。今は遊んでやればいいんだし

「お姉さん。最初に私のペットと戦わせて見たいけど、いいかな？」

「いいよ。」

「おい シュルティなめてると痛いめにあつさ。」

「そうだそうだ。」

「はいはい。わかりましたわかりました。」

「んじゃあ、改めて粉雪のシュルティ。懸賞金6億ベリー。ですよろしくね！」

「ええええ！！！」

「さあ、あまたをかける龍よ、私の龍よ、今ここに姿を現せ！！清流！！」

「おおおおおお！」

「おおきくなあれ。」

はい巨大化

「清流」の子達と遊んであげて。

『わかった』

「もうはじめていい？お姉さん。」

「・・・え、どうだ。」

「すげえ」

キラキラキラ・・・って、あ～あ
まあいいや

「清流。 いつてきて。」

『はいよ』

「「ふ、後悔するといいぜ。」

エースは飛び掛つていつて、
ルフィは、腕を振り回している。

「ゴムゴムのピストル！！」

変な方向に繰り出すな

「どうせ」

エースは殴りかかる。が、びくともしない。

『若造よ甘いな』

清流羽で風を起こす。エース達、飛んでいく、そして、氣絶

「やりすきーー！」

『すまない』

「小さくなあれ」

小さくなつていく清流。

「「Jの勝負私達の勝ちーー！」

「・・・」

れでと、起じて行なえますか

sideルフィ

つ、つえ～

二人係でもたおせ無かつた

傷すらも負わせレナカツタ

じっちゃんでも負けるかな・・・

あいつ、気に入つた。

海賊として海に出るとき、俺の船に乗せていこう！――

それまでに、あいつを越さないと・・・

side Hース

お、俺が負けた。

あんな、女のペットに
もしかしたら女は弱かつたりして、
もう一度勝負だ！！女の方と
そうと決まれば・・・側行動！！

side シュルティ

はい。いま、清流に乗って、Hース達を起こしてます。
いやー。どこに落ちたんだろ？
うーん。あ、なんかくぼみがある。
いってみよっ。

あ、いたいた。

起きてますね。つてそれぞれ別の方向へ・・・つておいおい。し
やーないな

「おーい。Hース達」

「あ、おまえ！！」

いちいちハモるなー！

まあいい

「乗せてくか、ひさしごとくね。」

「乗せてってくれのか！！」

田がきりひなルフィ

「お前勝負しろよーあとでーー。」

エース。

おーおい、骨折ぐらいのケガ覚悟しなきゃな。私、まだ制御でき
ないからな。

後で伝えておーい

はい着地。乗せました。

町に到着。

「勝負しろよーー。」

ヒ、エース

「いいけど。骨折ぐらい覚悟してね。」

「くっ、いい気になつているのも今だけだぜ。」

そつちがつつーの

つまあいいか。
わつわとこいつか

「んじゅこくね。」

「おう。」

「凍える涙ーー。」

Hースカチン」「チョンです。

「あぢやぢや。解凍しなきや。」

とつあえず。海につけて、あ、もうひと抱えてね。

「おまえ、Hースをよくもーー。」

「はいはい。今手当してくるからこれ終わってからね。」

対決（後書き）

さてさて、エースはどうなるのかな?
ガープを次ぎだしますね
感想、評価をください

友達認定！？

s.i.d.e シールティ

はあ、やつとちよつと解けてきた。
あと少しだね

「お前エースをよくも……」ゴムゴムのヘビストル……」

パシッ

つかんでエースと一緒に海につけた。

「おぼれるわ。」「
つかんでるからおぼれません……」
「お前……」の……。
「いい加減にしろ……」
「……。」「

ふ、所詮は子供。脅しだけで黙り込んだ。
はあ、疲れるなこの二人といふと……

「ぐ……うあ……。」「
「あ、目が覚めた?『ごめんね?ちよつとやつす、ぎた。』
「お前、何で本気でやらなかつた!……。」
「あんた、私本氣でやつたらこの島2秒ぐらこで消えるよへ
「うそをつけ!……」
「やつたげようか?」
「ぐつ……。」「

あ、ホントは一秒かもねw
冗談ではなくね。

「おい、シールティー！」

「何？ルフィ？」

「俺と勝負してお前が勝つたら俺の友達になれーーー！」

は？

普通反対でしょう？

あんた頭どうかなってるって

「普通反対でしょう？」

一応突っ込んだく

「だつてどうせ勝てないし。」

「うわ、こいつ以外に頭いいのか？

「普通に勝つたって画面くないし。」

ちょっと待て、お前先とつてる」と真逆まんですけど

「どうでもいいけど、こんどは骨折しても知らなによっ。」

「俺に打撃は通じない。よつて俺が勝つ。」

「はいはい。」

「んじゃこへやーーー！」

ルフィが、「ゴムゴム……じゃないの？」

普通の打撃できた。

ほえ～

予想外。

ま、私のほうが一枚上手だけどね
ぎりぎりのところで避け
私が腰に蹴りをいれる。

撃沈

「じふう。

「打撃は効かないんじゃなかつたの？」
「何でこんなに、ゴハア、つええんだ？」

「私は、うん、まあね。」

「負けたんだしょ。ほら、友達だーー！」

「あ、うん。」

「俺もな。」

「「Hースも？」

「なにその反応」

「「まあいいけど」

「まあ友達として、どんなことが会つても、どんなに遠くにいても
危機が着たらこの笛で知らせてね？」

そう言つて六が開いた玉を渡す。あ、ピンポン球くらいのだからね

「どうやって使うんだ？」

「ひつやつて、この穴にフーって息を吐くと。」

「玉が熱い！…なんでだ？」

青い玉が赤く変化して熱くなつた。

「これで分かるでしょ？」

「「どこで手に入れた!!」」

まさかなあ

移動しているときに、戦つてできた火傷や青たんを取つて合わせた
ものだとはな、いいにくしな。
まあ、適当に作つて話すか

「私が住んでいる町にガラスを作つてているのがあつてね?そこでつ

くつた。」

「へえ~。」

あつさり納得する?普通。

しないよねえ

まあ、いつか。

友達認定！？（後書き）

いかがでしょうか

シェルティ「だめに決まってるじゃん！！」

亀「なつ！！はつきり言つたな！！」

シェルティ「それよりも、他の作品もちゃんと更新してるの？」

亀「・・・まあいいとして次回はシェルティチヤンに恋をしてい
もらいます。」

シェルティ「だれと？」

亀「ひ・み・つ。」

シェルティ「殺すぞ！！」

亀「ふええ～お助けを～次回で分かるから～それ引っ込めて～！」

とこうことで「ひ～」期待！！

シェルティ「そんな見るやついないだろ（ボソッ）」

亀「！～ガーン・・・・・・・・」

恋する・・・・・

友達の契約（？）から10年後・・・

s i d e ショルティ

はあ～

暇だい！！

いまだに

凍える涙

熱く燃える心

鋭い目

速い翼

それは人間持っているなり

しか、思いつかん！！

あ、その自然バージョンもいいかも

「暗い縁！！」

おお～

一面につるが延びてきた。

意味は、縁が暗くなるほど＝燃えて灰になる＝人間で、まあ意味わかんないとと思うけどねこのつるは人間しか絡みつかないの

「苦しむ草ーー！」

お、これは
地面に穴が開いてその中に液体が入つてて
ジュー

木を入れたら一瞬にして溶けました。
つまり、食虫植物の中に入つているやつ?
なんも匂いしないけどなあ

「増える実……」

なんか実がたくさん出てきて、そんで

バシュ

つときつたら、斬った分だけ増えるは増えるは
使うほうも気をつけねば
あと、中からなんか足がたくさんある真ん丸いやつが……
以外にかわいい?

「吸い取る荒地!!」

えーっと、これは
まあ、あり地獄みたいな?
なんか針山みたいなのがあるんですけど……
やだわ〜
んで最期の決めセリフ

「それは自然が持つものなり……」

縁のでつかい鳥が出てきて相手に（このときはあらかじめ創つておいた人形）ちつちやい石を光の速度で

投げつける

・・・

おそろしい

と、まあ創つてみたわけだけども、

この技いろいろと危ないね。

本当に危機に直面したときだけ使おう

ともあれ多少なりとも暇つぶしはできたかな？

腕にしてあつた時計を見る

開始時間が1時だから・・・

いまは一時十分なわけで・・・

ホントに少ないけど暇つぶしできたね

ホントに少ないね。うん。

さて、きょうは、海岸に行って海王類つりでもしてお金がせりうなか？

よし、いこつ

ただいま海岸前

エースが神妙な顔をして海岸にいます
声かけ下さいね

「シールティ・・・」

「呼びました?」

「うおあ。」

おーおー

あからわあビッグコロビッグの

お前がよんだのにね

「で、なんのよつ?」

「なんでもねえ。」

「そう。」

私は海王類つりをする

この世のものではない力で引っ張る

ヒート...

上手につれました
さあ解体して保存食にじょう

私は腹をさく

そしていろいろなものを創る・・・といつても保存用食料の袋だけ
だけどね

皮は服にしたり、靴を創つたり、帽子を作つたり・・・
肉は地道に半分焼いて後で食べるよつ、半分は干して保存用

その工程を見ているエ・ス。ビックリしている

「なあ。」「ん？」

「よくそんな」とできるな。

「海に生きるものとして当たり前でしょつ?」

「・・・俺できねえし。」

「まあ、できなくても生きていけるんだね。」

「なあ。」「ん？」

「お前好きなやついるか?」「

「何をいきなり。」「

「いるか?」「

「いないけど?」「

「・・・う。」「?

「なんでもない。」「

「へんなやつ。」「

side Hース

俺は海を見ながらがんがえていた
あ〜くそ
むしゃくしゃする！！
寝る前には必ずアイツの顔が浮かぶし、
何してもアイツのことが気になつて集中できねえ
こんなになつたのはあいつに倒されてからだ
俺が凍傷になつたのを戦いで敵なのに看病しやがつた。
あのときの真剣な表情、俺が氣絶して意識が戻つたときのあの笑顔
くそ、あんとき抱きしめたかった。
こんな思いは世間ではたぶん恋を叫うのだろう
まさか俺がなるとは思いもやらなかつたぜ
でも、あいつも俺の流れている血をしつたら俺から離れていくだろう
そんなのいやだ
これが報われない思いだとしても
なつちまつたな
くそ、こんな思いをさせたのも、あいつ、シェルティだ

他愛ない会話をショルティイとしている

何でこんなに嬉しいんだ？

やべえ

俺がおかしくなつていく
ためしに聞いてみるか？

「お前好きなやついるか？」

「何をいきなり。」

「いるか？」

「いなide?」

「・・・・う。」

「？」

「なんでもない。」

「へんなやつ。」

いないのか

なんか複雑な気分だな

いなideって聞いて、よかつた。俺のことは好きじゃないのかつて思つてがつかりする自分。

はあ、どうじちゃつたんだ？俺・・・・

いかがでしょうか

シェルティ「あたしじゃなかつたのか？」

亀「誰かさんに変えてみました。」

エース「おい！亀」

亀「ひいい！！」

エース「ボソ・・・・・俺とシェルティをくつつけさせや。」

シェルティ「なんていつたの？エース？」

エース「今後の企画についてだなあ、ちょっと・・・。」

シェルティ「わたしにもませてよづ。」

こんなかんじです

さてさて、エースの思いは通じるのかーそれとも見事な片思いで終わるのか！

意外なことが多すぎて（前書き）

あ～もうめぢやくぢやだ
どう書けばいいのかわからぬ

意外な「こと」が多くすぎて

s.i.d.e ショルティ

いま、海にいます。

エースと、ルフイと一緒に

ここに蛇姫がいたら思いがけないほどの殺気が来るな。ああ、こわい

「ショルティ、お前つてどこからきたんだ?」

「聞くだけ無駄だと思つよ? エース。」

「俺も聞きてえ。」

「ルフイまで、。」

「いいじゃねえか。」

「その代わりあなたたちの過去も教えてね。」

「おづ…」「

はあ

「私は異世界から来たの。」

「ふーん。」

「ええつ…すげえな…」

思つたより反応薄…!

あと、普通は疑わないわけ?私のこと

「んで、その世界で神からの流れ弾を食らつて、死んで、そして能力もつて「ツチにいると、そんなんじだよ。」

「なんか、すごいな。」

「つすぐえ!…」

・・・

何でこんなに反応薄い？

普通はもっと驚くはず・・・
器でかいな～

そして、ルフィとエースも自分の過去をはなす

「シヨルティ、ゴールドロジャーの息子の俺をじうおもう？」

「どうもこうも血筋つて関係ないとと思うし、今のエースは、エース以外の何者でもないし、特別な扱いなんてしないよ。」「また・・・・・。」

？

「普通でないかな？
てか、差別つてバカのすることー！」

なんかエースの顔が熱いし、ここはお約束の

「熱もある？」

「ハアハアハア・・・・。」

ピト

えーっと、うん。

40 らへん

やばいじyan!!

熱あつたし！！

お約束も本当つてこともあつたんだなあ

まあ、看病しますか。

といあえず、このことを伝えよう

「ルフィイ。エースに熱がある。」

「ええっ！…ああどうしたうどいじょ。」

予想道理

ここは落ち着かせよう

「まあ落ち着いて。今直すから。」

「えつ！…なおせれるのか！よかつた。んじゃ速く直してくれ。」

はいはい

わたしは、体から熱を取るため、エースの一一番熱いところ（むね）を
触つて

「なあれ…。」

そういうて、エースに口付けをする。

「？？！…。」

「あ、気が付いた？」めんね勝手にしちゃって…。」「いや、べ、べつにいいんだが…。」

器でか！…心広！…

私だつたらなぐつてゐるのになあ

あれ？ルフィイが、してほしそーにコツチを見てゐ

「俺には？」

「なんで？」

「ずるいじやんか！エースだけ！…。」

「お前は熱でてねえだろ！…！」

「こ、じ、やん……」

「よ、く、な、い！……」

(実は、ルフィも、エースと回り合おうと思つてゐるのでした。
by 作者)

「私は別にいいけど？」

キスぐら、べつこいけど？

後で、エースにもルフィにも、代金請求するけどね

「んじゃあ。」

「あいよ。」

「俺は認めねえ……。」

「もうやつたけど？」

「……。」

「これで境遇は同じだな、エース。」

「くそつ」

「？」

ま、そんなことばっかりもよくて

「代金……。」

「……なんの」と?」「

「キスの代金一万ベリーね!。」

「たかつ」「

「女のキスはこんなもん!……あ、一括払いです。

「しゃーねーな。ほひ。」

「金がー。」

「まいど。」

私つて腹黒だな

意外なことが多すぎた（後書き）

いかがだつたでしょうか

シェルティ「エース最近なんか変だよ？」

エース「なんもかわってねえよーー！」

シェルティ「そう？ ならいいけど。」

感想・評価・お気に入り登録などーー！

やつてくれたらありがたいです。

フーシヤ村、去る

Sideシェルティ

エースが、17歳になり、海へと旅立つ日です。あ、ちなみに今、誰もいない海岸にいます。

卷之二

「俺、

「頭いたいの？」

「んなわけないぞ！！」

2
8

で？何のようなのかな

傳記

「ソラ、ソラの世界」

卷之三

なにそれ。

人呼んどいて・・・・

私も言いたい」とかあるんだにと
まあ

110

「な、何だ・・・?。

「これ、一年分の保存食と、水と、調味料と、……。

一
あ
り
か
と
う
」

(空氣読めよ！――お前)

あ、頭の中で声が・・・・・つて、たぶん神だろうなあ・・・・・

(悪かつたな、神で)

で、どう空氣読めつて？

(このタイミングで、普通は好きとか、行かないで、とかいうだろ！――)

なぜ？

(はあ～～～～～)

何が言いたいんですか？

(もういいわ)

なんなんだ！――

どいつもこいつも――！――

「シユルティ、俺お前のこと・・・・・きなんだ。」
「きなんだ？」

なにそれ

「だあかあら、好きなんだつてば。」

「はあ！？」

「好きなんだつて。」

「友達的ないみで？」

「性的な意味で。」

「・・・・・どう答えれば。」

「今思つてはいる気持ちを言つて。」

気持ちかア

普通

なんていえるかああああ

「好きか嫌いかで。」

う
ん

どうせちかといえは、好きだなじやあ
ま、いつか

「どうせかといふば好だよ？」

—
•
•
•
•

「おーい! Hーくん! 生きてる? か?」

アーティストやアーティストだ。

「シリルティ！！約束しろ！！俺が白ひげ倒して世界に名をどびこかせたら、結婚しろ！！。」

方七十九 総勢四百

「おし！…んじゃ行つてくるからな…！」

私は、いわゆる「しません」派です。

「一回」の政治小説としての歴史的意義

「五、六億・・・・。」

- 100 No? -

卷之三

あとで請求書用意しよう。・・・

「キス。」

「おれも。おれも！！」

「六億だぞ？」

「いいからおれも！！！」。

「はいはい！」

「え、たあああああ。

請求書追加

「そもそも出港したら？」

「そ、うだぞそ、うだぞ！・！・！。

「私も、いろんな町行こうつ

「ええええええ？」

「いじせん」

「お前は俺と行くんだ！」「

「！」「んな」とまでそろわんくていい

「「ああ、まつて」」

「たゞ一なじ」。

こうして私はフリー・シャ村を去った。

フーシャ村、去る（後書き）

エースめっちゃ 積極的

いまさらながら、シェルティの今の姿しようか～い
白い髪は、ひざまで伸びてて、体形は、蛇姫並み！～顔は知性的だ

けど、どこか優しげな感じの顔

一回なつてみたいな、シェルティに

感想・評価・お気に入り登録などよかつたらしてください～！

兄に勝ちたいので・・・

なんかちやっかり・・・

s i d e ショルティ

あ

ルフィーと一緒に行くはずだつたんだけな
ま、いつか

ど〜こ、いこつかな〜

あ、ニヨーガ島?的な感じの島あつたよねえ
いつてみよつ。

たぶん蛇姫いると思つて、あと、マントのお礼もしなくちゃな〜
どんのがいいかな?

やっぱ、蛇姫の女の子だし、甘いもの好きかな?
よし!

トリュフをつくつひ。
え〜つと、ト準備

センター用のチョコレートは、細かく刻んでボウルに入れておく。

まな板の上にオーブンシートを敷いておく。

ホールディング用のチョコレートは細かく刻み、ボウルに入れ、約
50〜55 のお湯で湯せんにかけて溶かしておく。

絞り袋に丸口金をセットしておく。

ガナッシュを作つて冷やす

- 1・生クリームを鍋に入れ、中火にかけ沸騰直前まで温める。刻んだチョコレートを入れたボウルに一気に注ぎ、泡立て器で混ぜ合わせる。チョコレートが完全に溶けてなめらかなクリーム状になるまで混ぜる。

- 2・お好みでラム酒を加え、混ぜ合わせたらそのまま涼しい所に置いて冷やす。時々ゴムべらでかき混ぜながら絞れるくらいの固さ（混ぜるときにもつたりとするくらい）になるまで冷やす。

- 3・丸口金をセットした絞り袋に「2」を入れて、オープンシートを敷いたまな板の上に棒状に太さを均一に絞り出す。絞り袋がない場合は、トリュフ1個の大きさにスプーンですくつて落とす。

- 4・そのまま冷蔵庫で15~30分冷やす。

ガナッシュを丸める

- 1・冷蔵庫で冷やしたガナッシュを、包丁で大きさをそろえて切る。切りにくい場合は、包丁を温めて熱で溶かすようにして切るとい。

2・切ったガナッシュを、手のひらで団子状に丸める。手が温かすぎるとどんどん溶けていきます。手は冷水などにつけて冷やしておきましょう。

ガナッシュにホールディングする

1・ホールディング用に溶かしたチョコレートを手につけ、丸めたガナッシュをコロコロと手のひらで転がしてホールディングする。

2・ホールディングしたガナッシュを、バットに入れたココアの中で転がして、表面にココアをまぶしつける。

です。

あれ?何でしつてるんだろう。
まあいいか。

おー島がある!!

ここで食料調達しよう

とうちゅやく

ん?

なんか音が・・・・

「「ベルメールさん！！」」

あ

ナミのか

ココヤシ村だつたつけ？

「大好き。」

あ

撃たれるやつか

と、考えてる間に勝手に体が動いて

「死ね・・・。」

あ、殺しちゃった？

ま、いつか

「「ベルメールさん」」

「ノジコ、ナミ」

「「わあわあわあわあ」」

ま、ハッピー・エンドかな

つて、チョコチョコ

「お取り込み中スマセン。」じじつてチョコとか売つてますか？」

「あ、はい。」

「どに売つてますか？」

「あ、あこです。」

「ありがとう。」

「「助けてくれてありがとう」」

「どういたしまして。」

ちゃつかり謝つてるね

いい子達だわ～

とまあ、成り行きで助け、チョコもちゃつかり調達したシェルティでした。

「あ、名前聞くの忘れた。」

という、ベルメールさんの発言があつたとか無かつたとか・・・

なんかちやっかり・・・・（後書き）

ほほトリュフの説めーしかしてね～
ははは
笑うしかないな
ということですが
次もよんぐだされば光栄です。

「ミー ガ島での出来事

s.i.d.e シュルティ

いま、清流の上で調理中・・・
良い子はまねしないでね wあ、まねできないか
創つたので冷蔵庫・・・なかつたな、そういうや
つくひつか・・・

こういうときは、異空間をつくひつか。
作り方は気にしないで
つくりました。

そこにおぐ、湿度もなんも無いので腐らないはずです。

つきました。
「ミー ガ島です。

「お~~~~~い。だれかいりますかあ?」

「「「だれだ! ! ! 」」

「お、きたきた。粉雪のシュルティです。」

「 「 「 「 「 （賞金首がなのつていいのか？）」「 「

「蛇姫にあわして～。」

「蛇姫様のおな～り～。」

「 「 「 蛇姫様が帰つてらつしゃつたの？」「 「

「んじや。かつてにはいつとくね。」

「 「 「 まちなさい！～！」」「 「

「まつもんか～！」

「まつもんか～！」

と、まあ声がした広場に行きました。
つきました。

「だれじゃ、童の通り道に子犬を置いたのは。」

ガツッと、二犬をける。
はあ？何で蹴る？

「お～。ハンコック！。」「
「誰じや童には向かうのは。」「
「シユルティだけど？なにか？」「
「～～～。」「
「とにかく話がしたいので先にお城つぽいものに入つてゐよ～。」「
「メロメロメロウ。」「
「きつかないよ～」「
「～～。」「
「わせいつてるね。」「

勝手に話して勝手につきました。

「蛇姫さんまだかね～。」「

あ、ちなみに柵を乗り越えて入ったよ。玄関から入させてくれないでしょ。

「子犬を蹴るのはどうかと思うけどね。」

「童の湯浴みの準備は……。」

「は、整つております。」

「蛇姫様のゆあ～み。」

「蛇姫様の湯浴みよ。速く外へ。」

下は大変なことになつてますなあ。（人事）

あ、ルフィ的な入り方しようか。
天井突き破つてはいるという……
よし、しよう。

今頃入つてるようだし

ドカーン

「お、溺れるウ。あ、浅かつた。セーフ。」

セリフあつてるかなあ

「誰じや。」

「あ、お前の背中……。」

「！！！」

「姉様。」

「大丈夫？」

「背中を、みられた。」

「たとえ恩人でも生かして置けないね。」

「ここから出て行つてもらう。」

「こあ、それはいいんだけどねえ、話があるんでベシトみたいなの
があるところいるから、後から来てね
そんだけ。」

「わかった。こいへ。」

「「姉様」」

「あとで、石にじてやる。」

ん?なんか嫌なのが聞こえたナビ・・・
ま、いつか。

ただいま、ベシトのあとで元に戻ります。

「童を呼んでギリッシュとこいのじゅ。せじ。」

「マンド、ありがとうな。それと、トココフ。」

「トココフ?。」

「まあ、食べてみて。毒は入ってないよ。」

「おこしこ。」

「せう、よかつた。あと、サンダーバードの分とマコーラードの
ぶんもあるよ。」

「「え、?。」」

「一応、船のれてくれたし。」

「あ、ありがとう」

「よかつた二郎お。」

「二郎ノ婆」

「まだどこから。」

「二郎婆の分もあるよ。」

「ありがとう」

「う、おいしこ。」

「よかつた。」

そうして、しばらくまつたりしたので

「んじゃ、もうそろそろ帰るね。またいつか寄るのでそん時は四口

シク。」

「わかつた。」

と、二郎が島を後にした。

一一三一 ガ島での出来事（後書き）

まさかの、蛇姫様が気に入るというアクシデント！！

シェルティ「まさかとはなんだまさかとは！」

亀「てか、エースとの結婚はどうなったの？」

シェルティ「できないうしょ。」

エース「！！」

とまあ、こんなかんじです

（どんな感じだよーーー）

さて次は・・・どうじょうか

神になりました

s.i.d.e シュルティ

後にしたのはいいけれど、
どこにこうか・・・

先が真つ暗だ・・・

ペツト・・・

そうだ!!

ペツトがほしー!

簡単に死なないやつを

(ところられて、神をさじりだー)

頭ん中で、言つてみる。

寝るとかアンの?

(当たり前だらう、我とて元は人間だ)

ほえ~初耳

(それはいいが、なぜ呼んだ・・・)

ペツトーーー! 憧想でペツト創りたいーーー!

(んなむぢな・・・)

神様！お願い！

女の必殺！眼を潤ませて困つていろよつに見せかける！…

(よし！いいだらう)

すゞ・・・

まさか効くとは思つてもみなかつた

(ただし！)

はい？

(神になれ)

はああああ？

何で？無理！

めんどくさい！！

(大丈夫だ、誤つて召喚されたり、光臨とかもしなくていいから・・・
・)

しなきやなんなかつたんだ・・・
で、神の能力つて？どんなのがプラスされるの？

(・・・。今の全ての能力が、1000倍になる。死者を一人につ
き一回だけ生き返させることができ
る霸氣使いじゃないとか攻撃できない。悪魔の実も通じない。一回死
んでも大丈夫。寿命は無限。自殺は
できる・・・)

す』。

(神になるために試練を乗り越えなきやならんがな……)
どんな?

(一番強い神を)

神を?

(負けと認めさせる)

むりです。

(大丈夫だ。俺でも口で何とかなつた。)

ふーん
んジャ大丈夫だ。

清流とともににつれてつて。

(意外とあつさり來たな。まあいい、いくぞ)

つきました。

「ヒーヒが、神の領地といわれている。「聖地」だ。
「わりとありきたりなのね。」

この人。眼、髪ともに金で筋肉質。顔はイケメン?

「おまえ、予想以上にいい女だな。」

「あんたがしたんでしちゃが。」

「まあな。あれは顔であつて、からだまではいかないものだつたらうな。」

「顔だけかい……。」

一応突っ込んでおく

「で、最強の神様は？」

『こーじゅ』

「お、わざと近くに」

『おぬしも神となりに来たものか

「いかにも。」

あら？

いつのまにか神さんいないよ？

「で、試験を早くして頂戴。」

『よかうひつ』

「で、武器とかは？ いらないの？」

『つかうのは、こぶしだけじゃ』

「はああああ？」

なぜそつなる。

あんたなら傷ついても大丈夫でしょうがに。

あ、最強神の姿は、コツチも男で、筋肉質。髪と眼は金色です。

『いぐれ』

「はいな。」

スカツ

以外によわい！！

「パーンチ」

『ぐほあ。負けじや』

「はやいな・・・。」

『そなたに能力を『えよう。』

「わくわく」

『カツ』

「・・・。」

なーんにも変化なし。

髪は白だし。眼もルビー色だし・・・
あ、でも、額の十字架が・・・かわんない
手に、おおー！右手に薔薇の指輪が！！

『ふむ、そなたは「美の女神」か、』

「そうですか。では、帰ります。」

『まで！』

「ハイなんでしょう」

『おぬし、力がほしくないか。』

「いえ。全然ほしくないです。」

『そうか。つてえええ？』

「これ以上強くなつても仕方が無いかと・・・。
『霸氣使いの攻撃にもあたらなくしないか？』

『よけりやいいでしょ。』

『きにいつた！！我的后となれ。』

「やだ。」

『なぜじやーー！』

あ

心ね、婚約みたいなものされてますしね・・・

「なにい？」

？」

もしかしてこの人も心読んだ！？

『俺がモテ過ぎるだとお?』

いやいやいや言ひてないし……しかも思つてないし……逃げよ！」

「おこひー..!!」

逃げました。

ん? いつのまにか生暖かいものが手の中に……って、たまー?

はいけいシェルティ様

この卵を持つていろ

そしたら心の中のお前の聖獸が生まれるだらう
生まれたら指輪に

入れ

神より

氣の効くやつ。『ご一寧に説明しやがって・・・

覚えとれ!後で呪つてやる!!

ともあれ、無事ペツトの聖獸が手に入つたんだ。

呪つのは、やめておこう。

神になりました（後書き）

ドンドン最強になつていくショルティちゃん
さてさてどうなるかな?
何が生まれるかは次の話でーー。

s.i.d.e シールティ

私が、神、か。

ところでの子どんな子の裔つのだらう・・・ってか、どんな子が生まれるのだらう

男？女？

できれば女がいいな～

清流、男だし・・・

(おい)

ひさしひりだな。神上

(それはお前もおなじだうが・・・美の女神よ)

あんたは何の神？

(転生)

そつか。

(お前に伝えたいことがある)

ナンダイ？

(神の能力を使うには、それぞれの覚醒の「しば」を使わなきゃならん)

どんな？

(人それぞれだ)

まじか・・・

(それともう一つ)

なんですか？

(覚醒したら、髪の毛が、お前だと銀色になり、眼も銀色になる。
そして、羽が生える。服もそれっぽくなる。)

どんなんだよ・・・

(こんなんだ)

!!

にあつてねーな。転生の神よ・・・

(ひ、つるといー！…それより、お前のも見せろよ・・・)

まだ言葉知らないし。

(知つたら教えろよな。)

りょーかいー

さてと、考えるか、

まあ、適当に

「月夜の『』とく舞に降つよー・覚醒ーーー。」

おお~

眼も、髪も、銀色になつて
服は、袖が無いふわっとした綿みたいに白いドレス・・・
なんか。ウエスト部分に銀色の細い糸が、巻いてあるみたいでナビ、
三十巻あぐらこー・・・

(お~い! 転生の神よ)
(なんだ、覚醒できたのか)

うん

(ーーーにあつてるな)

そつかな?

まあ、お世辞でもありがとつ

(ズバッヒ、感想を語つた相手に対してお世辞などいふわんー。)

あ、つそ

それより、転生の神の聖獣は?

(こいつだ。)

金色に輝くねずみでした
・・・
微妙。

(・・・。また素直に感想を・・・。まあそんなところもいいんだ
けど)

ん?なんか言つた?

ま、いいけど。

報告お~わりッと

さてさて、どう戻るのかな?

どうもどるの~!?

ははははっは

何で肝心なことを、聞き忘れるんだ~
ま、適当にい~づ

「解除」

いけたか?

いけたね

うし、お~

うん。

この卵何が生まれるのかな?

ボワアア

卵がひかつた?

ピキ

ん?なんかいやなおとが・・・

ビキバキ・・・バリバリバリ

ひえええええ

割れてるウウウ

「みゅう」

ん?

なんか手から声が
生まれた?

(お前が我を育てた主か)
(いかにも)

うわ~

めっちゃ上から田線

(我と契約するか?)

(つむ、しょづ)

口調はつられで、こうなつちやいましたw

(契約のため、我に名前をつけよつ)

ん~

名前ね

何がいいかな?

このこは、ホワイトタイガーの黒い部分が金になつて白い部分が銀
になつた。

今は、ちつこい虎

です。

タイガー？

いやいや。

あつきたりすゑるし、かわいそつ。

金と銀 金銀 ゴールドシルバー ジーるヒシルバー

思考回路が・・・

こちらの頭は無いのね・・・

私の覚醒のとき眼と髪の色と同じだし・・・

あ、タイガーアイツてのあつたよな

それって宝石だよねえ

宝石はジュエリーだし

ジュエリー・・・

うん。やめよつ

(まだか・・・。)

(あんたつて男?女?)

(女だが?)

うし！

暁でどうだ！－！

暁

うん！

男っぽい

はあ－

暁

赤月でどうだ！－！

赤なんて無い－

夜だ・・・

もつそれでいいや・・・

(夜)

(わかつた。我的がは夜。このものと繋約する)

夜・・・

「みやー」

「ん?」

(よつじへなミーリョジタリヤホー)

か、可愛かれる~

思わずむわわーって抱きしめてしまつた

(ぐ、ぐるこみよー』しうじんやホー)

「あ、ああ!」めん

『なにやつるんだ。主達は』

「ん~、なんだろ?」ね?

「みょ、みやみやみやほあ~」

「? ? ?」

『? ? ?』

「あひやもつまあえ」

「意味分かりません」

『解読不可能』

「ほつえで、やつとい、ねむおひびくられつ~

「おお~」

『確かに、この密談でこの蝶つ方がだと可愛いな。』

「でしょでしょ?」

「でつみでつみ?」

『・・・。』

うーん。

さすが赤ちゃん
まねしたがり？

「あ、あれなんだ？」

『海軍？』

「たたかうよー。」

「いきなりちゃんとした言葉で・・・。」

『気になせないぐぞーぬしよーーー。』

「まつて。」

「セウしたの？ぬしわまあ

『？』

「月夜のじとく舞に降りよー覚醒ーーーのせひが見つかんない。あと、マントもとつて・・・変装なつ」

「『おお～』」

「戦わなくてよしーあと、夜、入れ

夜が光に包まれ、指輪の中に戻った。

『よかつたのか？』

「いいんぢゃない？」

『目的地は？』

「んじやあ、あのシャボン玉のところ。』

『解

聖獸誕生（後書き）

意外に賢いですね。シェルティちゃんは、
ま、頭を賢くしただけある・・・
なーんて雑談はいいとして・・・
先のストーリーが思いつかない
ワンピースかこれ？

とか思いつつ書いていきます。

このシェルティは海賊とかいろいろ入る気がないので、ってネタバレ
まあ、がんばりますんで、見捨てないで！

また、奴隸解放

s.i.d.e シュルティ

はあ。

ええ、つきましたよ?
シャボン玉の島に・・・
さて、なにしような
まず、騒いでいるところへ行つて
なんかしよう。

「 「 「 「 わああああ~」 「 「 「

「 1万」

「 4万」

オークション?

「 ねね、何やつてるの?」
「 え~っと、奴隸オークションだよ」
「 奴隸! !」

よし。この会場壊すの決定。

『 まじーはやるなーー』

あ、ちなみに今、清流は十字架の中にいます。
で、何で奴隸にこだわるかといふと・・・
はい。かわいそまだからです。
それだけです。

あと、天竜人も嫌いです。

なんでかつて？

奴隸も人間なのに、人間以下つておかしいでしょ？
なにさまだつツーの。

あと、えらそうで、癪に障るから。

「早まる？膳は急げって言うでしょ？だくかくら。」

『海軍が出たらどうする』

「倒す。」

『大将でも？』

「倒せるよ？」

『・・・死ぬなよ』

「死ねると思うか？」

『・・・』

お？

あ～んな所に天竜人はつけ～ん！
殺す！

あ、ちょっとと待てよ。

天竜人も奴隸になっちゃえw

というわけで、奴隸になつてもうつたために、攫います！

ちえつ

天竜人も護衛が多くて入れやしない
もつと有効に金使えての
もういいや。

『何する気だ』

「ダミーの天竜人置いて、なんか言わせて、天竜人の気配消して、
攫う」

『名案だな』

「でしょでしょ！」

『では、がんばれ』

「はい」

さて、やりますか。

まず幻影設置。

本人の気配消す。
なんか喋らせる。

「おまえら、何ボーッとたつているかー速くゴッチへ来い！」

「は、はい」

よし！成功

んで、捕まる。

成功。

天竜人の服を変えて、ぼろぼろにして、そして、受付へゴー

「まだエントリーできるか？」

「ぎりぎりだな。」

「じゃあ、これをエントリーしてくれ。」

「わかった。」

せいこ～う

ふふふ

さあ、天竜人よ。天竜人に買われるとい

オーッほほほほ

ふ、ざまあ

ま、見事に潜入できただし、天竜人以外開放してあげますか。
えーっと鍵はどこかな？

あ、ここだ

「攫われた人たち、開放してあげますから静かにはずしてこちらに
来てください。」

「「「「「「「「わかった」」」」」」」」

お

物分りがいいこと。

あ、もうはずしたのか。

えーっと、見えないように気配を消して、受付から帰る。

脱出成功！

「「「「「「「「ありがとう」」」」」」」」

「うん！氣をつけて帰つてね。」

さて、奴隸も解放したことだし。帰るか。

天竜人の幻影消して。

今頃大騒ぎしてゐだらうな～

は、さまあ

あ、でもこ～からさつさと逃げないとな。

海軍と相手するのはめんどこいし、

「あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、我の
前に現れよ！～」

清流召喚！

乗つて逃げます

そよ～な～

また、奴隸解放（後書き）

なんかもう大変だね
はははつは
はあ
すごいなあシェルティは、どんだけ～
シェルティ「神だから」
亀「・・・」
まあ、つぎは、いろいろします。
はい。

すい・・・。

side シルティ

ひまうだ

何しよう。

そうだ!!

転生の神に相手してもらおう

一応神様の世界にいるらしく、神にならないといけないらしい
はあ、なるか・・・

「月夜の語」とく舞い降りよ・覚醒・・・」

そして、聖獣の夜を出して、清流をかたづけて、

「おおきくなれ。」

あ、でつかくなつた。
この子にも効くんだ
さて、

「夜、聖地へいって!」

『りょーかいみや』

・・・。

かわいいい

でもでつかいから、なんか変な感じ・・・
ま、いつか。
い

つきました。

「おお～ 美の女神よ。我に会いたかったのか…」

「イエ、転生の神と戯れにきただけです。最強の神には会ってこに来るつもりじやないです。」

「照れ隠しはよせ。」

あ～メンディイナ

もういいや。こいつを味方につけちゃえ。
かわい子ぶつてやれ！

「え、じゃあ本当のことってこいつの…？」

「ああ。」

注意、これからは、本心から言つていいるのではあつません。

「私のこと、しゅもつ。」

「＄＄＄＄＄ああ」

ええええええええ

最強さんか？

この普通の神を？

好也！

あにてて
あにてなむ

和音道力

もう一
まい

۱۰۷

「なんだよ、

私は好きで嫌いでも無くて普通たよ普通

ま、こんな神ほつといて（ひどい）

「どく」
転生

「ん? よんだか? シエルティ」

「お、いたいた」

なんのようだ

遊んで!

ナセ

ひまだし・・・。
ダメ?」

私は上目づかい＆なみだ目をつかつた。

「つ・・・。しょうがないな。」

「やつた。」

私の勝利！

さてさて、夜は、最強の神を見た瞬間かたづけたので
だしますか。

てか、ワンピースのキャラと合わないと、読者が読んでくれない
この話だけやるしてw

「私の、聖獣の名前は夜。そつちは？」

「金太郎……」

センス無ー

かわいそう……。

「かわいそうみたいな眼で見るなー！」

「だつてかわいそうなんだもん。あ、巨大化できる？」

「巨大化？出来るわけ無いだろ？できたら男なら太陽の～～神つ
てなるし、女なら月の～～女神つてなるぞ？まあできた奴いないか
ら、ホントかどうかわかんないんだが……。」

「私できるよ？」

「うそだあ～」

「ほんとだよお」

「んじゅやつてみろよ。」

「おく。お起きくなあれ。」

「!!ほんとにできるやつっているんだあ。」

「ね？」

「・・・。」

「!!の子達つて業とかできる?。」

「できるだらけ。せんたうひのせあこは。」

あ、金太郎出てた。

「シーラードですね？」

「私の夜はなにでさるの？」

「え」とねえ、聖なる炎、聖なる雷、聖なる氷、聖なる風、聖なる

光聖なる眉上

「おしゃれでかわいい」などと評されることが多い。

「アーティスト」

卷之三

聖なる炎なら、で、つかいほのおがあらわれ、

風なら、台風が発生し、

光なる セーと出て来た魔物を天使にするし

はい。主人よりすごいかも・・・。

清流並み

二二

۷۰

「ほつやね？すいいでしょ？ほめてほめてー。」

えらい！ これたゞ魔物全滅したやうがも……」

頭なでながらほめた

はあ、

「ほんとだね。」

一
またな
」

「うんー。」

さてと、元の世界へ戻りますか・・・。

あいにね・・・。(後書き)

ワンピースよ!そしてワンピースの作者やんよ
崩壊しまくつてすいません!!

こんなんですけど、温かい眼で見守つてください!
そして、読んでください!

駄目元で・・・いつてみました。
分かつてるんならもじせよ!!!
ですね。でももじせません!
ああ

ばれあがひた。（前書き）

サブタイトル意味不でえすよねえ。
かみ合つてないけどよろしくお願ひします。
(なにをだよ!..)

ばれちゅつた

s.i.d.e ショルティ

え～っと、三年すぎました。

え？ 飛ばしそぎ？

しょうがないじゃないか～なんも無いんだもん。
あるといつちやあるけどね。

1、なんか大人っぽくなつた。そして、ナンパされる日々
2、なんか身体能力が5倍になつた。暇だつたから
3、技の強さが、1000倍になつた。暇だつたから

です。

なんかいろいろとすごいくなつたよね。いや、元々ではあるけどさ・・・

- 今頃、ルフィはどうなつてるかな。
- エースは大体予想つくから気にしない。
- もうそろそろナミさん本当の仲間にしてるかなあ

一回ルフィのもとへ行つてみよつと

「あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、我の
前に現れよ！！」

うし、後は巨大化するだけ

「おおきくなあれ。」

『主よ、我になんのようだ。』

「ルフィのどこへ連れてつて。」

『・・・わかつた。』

「場所分かる？」

『主の傷で作ったあの玉があるから大丈夫だ。』

『そつか。んじや、お願ひね。』

『承知した。』

とつねやぐく

「仲間だ。」

「・・・うん！」

あ～このシーン？

ルフィがアーロンを倒して、ナミを本当の仲間に・・・つてはあ？

アーロンは倒したでしょ？

なんで？何を倒したわけ？

ん？

アーロンの兄らしき人が・・・

(兄つっていたの？いたつてことにしてください・・・by 作者)

ああ。アーロンの代わりにやつたつてわけね。
てか、敵討ちの人の間違つてない?

私はここにいますよお?

つて、死んだ後じや意味ないか・・・。

「あのー。お取り込み中スイマセン。ここにルフィ 「あ! シェルテ
イー!」

「 「 「 「ええー?あの粉雪のシユルティ?」 「 「 「

「そうですが。」

ずざざざざ

・・・。

何で皆さんそんなに避けるんですか?

あ、にげないでえ

この災いは私だと思つてます?

誤解ですよお

どつかでも同じことになつてましたつて

「・・・。ぐすん。」

へこむなあ

「あーアンタはーあのときの女の子ー!」

「ああーあの女人に抱きついてた。オレンジの髪の子ー!」

「あのときはありがとづ。」

「いえいえ。お店教えてくれてありがとづ。」

お、覚えていてくれたア

感動!

「なんだ、お前ら友達か？」

「「知り合いです。」」

「なあシエルティー！俺の船にのらねえか？」

「いや。」

「なんで？」

「海賊にはなりたくない。敵が増えてメンビにから。」

「ええ。のうぜ！」

「それより、ナミさんだっけ？その子の面倒ちやんと見るのよール

フイ！」

「わかつてらあー！」

ほんとにわかつてるんだか・・・

ゾロとか、サンジとか、ウソップとか、ルフィの手当は？

「手当では？」

「ああ～そうだった。シエルティーにこいつらはいんでクレねえか？」

「はあ～。いいよ。」

「やつた！ありがとうー。」

めんどこいナビ。運ぶか。つこでにナミも。

「ナミ。」

「なに？」

「あなたも腕、けがしてるでしょ？運んでつてあげるよ。」

「いいよ。あるいていく。」

「わかった。」

ゾロとサンジを看護室？見たいな所へ運んでいくて、誰にも見られていなか確認して

「月夜の『』とく舞い降りよ、覚醒」

女神になり、ゾロの傷、サンジの傷を治してくべ。
ほつまつ・むちむち魔法。

エースのやり方はしないのかって?
そんな命知らずな行動できるかーー!

「……お前誰だーー!」

あ、ルフィに見つかった。
メンジ。よし!偽名を使おう

「わたしはルーン。この方達を治しました。ちゅうじー。あなたのが我をしてるでしょ?治すのでここに座つてください。」

「あ?ああ。」

私は、傷を指でなぞつて治す。

「これでよし!」

「ありがとな!」

「いえいえ。あ、もつそろそろ帰らなくては。では、また」

逃げる

みかん畑に隠れて

「解除。」

ふつ。

二三九

「！！シェルティイ？！」

100

ジャなかつたね。

— 今の姿何? —

オーマイガー
わたしの女神版まで見られたなんて！

苦しい言い訳

「
」

「一で?」
「ある墓は?」

卷之三

۱۰۷

「・・。」
「ごめん。」

何であなたが謝るの？

「アサヒ」一九三〇年四月

「普通は守れるものがあつたら守るでしょう？」

— 1 —

「あ、こんなこと言つてもシャーないけどね。それよりも、ルフィ

「？」

「仲間になつたせつてよ。」

「うん。」

「てかもつ仲間か。」

「うん。」

「もうそろそろ行かないことね。」

「え?」

「ルフィイの宴。」

「ああ。」

「いくよ。」

「うん。」

たぶん。めんどくさいことが起きそうだな。ま、いか

ばれひちつた（後書き）

ん~と。

はい。なんかすいません。

よみにくいですよねえ

でも読んでくださって皆様ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

こまわりながらショートですね・・・。

s.i.d.e ショルティ

「宴だああああ！」

「はいはい。

えーっと、今は・・・

前回でも言つたとおり

ルフィの宴です。

「ショルティ！ なあ！ これ食べねえか？」

「いいです。自分で選んで食べます。」

「メロリンメロリン～」

「はいはい何？」

上から

ルフィ

私

サンジ

ナミ

です。

ちなみにゾロはなんか飲み比べしてます。

はい。にぎやかですよ？

町の人たちもいるし、主にルフィが・・・

「私が技の練習していくる。」

「いく！」

「なんで？ナミ？ゾロ？」

「あんた、粉雪のシヨルティでしょ？どうやって5歳で天竜人をころし、大将までも重症になるくらいの力、見せてもらいたいから。」

「俺は、お前と手合わせしてみてえ。」

はああああ？

私はか弱き女ですよ？

そこらへん間違えてませんか？

まあ、か弱くはないと思うけど・・・。

まあいつか。どうせ暇だし、手合わせ（といづかの暇つぶし）やりますか

「いいよ。」

「わかつた。」

「じゃ、海岸いこ？」

「おk」

すんなりきました。

一応条件決めときますか。

「手合わせするときの条件。」

「なんだ？」

「一、剣じゃなく、木刀を使うこと。

二、私は悪魔のみの能力を使わない。

三、殺し合いじゃない。

以上

「何で悪魔のみの能力使わねえんだ？」

「不公平だからと、使わなくても大丈夫だから。」

「甘くみてつと怪我するぞ？」

「アーリンヤ。」

「合図をしたら開始ね？ わく？ ナリヤス？ ゾロ？」

「「おー」」

そして、軽く体ぼぐし（とこづな）の試合（）をしますか。

「初めー。」

ゾロが切りかかってくる。

私はすれすれで避け、腕に足蹴りを食らわす。
ゾロが木刀を離してしまつ。だが、

「108ポンド砲ー。」

「あまいー。」

を撃つてくる。

私は避けて最後の一本をついでから口を落す

「ええ？」「アーリンヤ。」

「くつ・・・。」

「一応言つとくけど。私が本気出してたらあんた。一秒ともかからず死ぬよ？でも、こんなに強いんだからもつと鍛えると、いつか私を越えるかもね。」

「くいなみてえだ・・・。」

「なんかいった？」

「いや。なんでも」

「私に挑んだ褒美として、私の能力みしてあげる。」「本当？」

あ、今の本当？はナミです。

「本当。」

ちなみに悪魔のみの能力つてのはないですよ。

魔法のことですよ。

まちがわないでね？

「月夜のごとく舞い降りよ。降臨！」

「「きれい（だ）・・・・。」

「凍える涙！

熱く燃える心！

鋭い目！

速い翼！

それは人間が持っているなり！」

「「・・・。（この人には絶対かなわない）」

ちなみに。凍える涙／それは人間が持っているなり！…までちゃんと
技は出でますよ？

凍える涙なら吹雪

熱く燃える心なら火

鋭い目なら雷

速い翼なら風

で・・・。

「まだあるよ？

暗い縁

苦しむ草

増える実

吸い取る荒地

それは自然が持つものなり！」

「「・・・（この人だけは絶対敵に回したくない）」」

この技もさつきと同じです
分かりにくかつたら「メンナサイ

「で。この子達

あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、我の前に現れよ！！」

清流（小さい版）

夜（「ツチも小さい版）

だしました。

「か、かわいい～」

「くえるか？」

「いやいや。食つな。」

上から

ナミ

ゾロ

私

ナミは夜をだつこしてて、ゾロは尻尾持つてる

「や、やめによ～」
「かわいい！」
『やめないか！火を噴くぞ～。』
「おお～しゃべった。」
「たすけて（たしゅけて～）』』
「ははは。」
「『おーー。』

「はいはい助けますよお。」

「ひこう場合は巨大化

「大きくなあれ」

「！すげえ（すげい）」

「ほらかいほうしたよ？」

『「ありがとう主よ』』

「『えがかわった。』」

はいはい

清流と夜はちっこい時は子供みたいなこえで、でつかい時は成人してみたいな声になります。

さてと、ルフィの進行状況も分かつたし、帰るか。
ここで一泊してから。

「もう寝るわ。お休み。」

「ああ。」

「お休みね。」

森に行き清流や、夜の上で守るように私は眠りについた

こめれいながりにてかね・・・。(後藤わ)

あとがわはあるせじなこときがあつます。
「」承くだせ

新しい仲間

sideシールティ

「俺の使い魔になれ！」

「ええええええ！」

あ、ゴメンナサイ

今取り込み中で・・・

説明？

ああ、しますよ
えーっとですねえ

（十 分 前）

「さて、なにしようかな？」

いつものように、今日何をするか考えながら清流に向って空を飛んでいます。

ドサツ

「！？」

『なにごとだ？』

「なんか落ちて来た？のかな・・・。」

落ちてきたのもよく見る

人間のようだ。

髪は黒で、眼はわかんないけど・・・。

パークーにジーンズ。

うわ～ナツカシ～

額にダイヤがある。

指には・・・。

はあ？剣が、2つ交差したような感じの指輪がつて、
こいつも神？

「お～い！ いきてますかあ？」

「・・・。」

「返事がないただの屍のよつだ。」

一応いっとかなきやね。

「一・?・」
「め・・・。」

「ここは、ワンピースの世界で、今私のペットの清流の上にこります。

「おとはあく・・・じゅな～い！」

・・・。

うるやいな。

落つことしてやる。

「わわ、落ちるって！」

「落としてるんだよ？」

「でで～い！ ムーン！」

額のダイヤから光が出てきて徐々元ゴーパーンの形をとる

『よんだか？』
「た、助けてくれ～！」

『むりだ。』

「見捨てるのか卑怯者！」

『私は、その美の女神にはかなわん。』

「なんだと！－！」

あ～も～
うるさいな。

「おまえ、美の神だつたのか？」

あ！

眼は黒でした。日本人はつけん！
やつたら

「そりだよ？あんたは戦いの神でしょ？」

指輪がそう物語つてゐるじゃない。

「…なぜわかつた…。」

「指輪で分かる。」

『『うんうん』』

「で、あんたも転生者でしょ？」

「なぜそれも！」

「額になんかあるでしょ？それでわかつた。」

私だつてついてたしね～

十字架

まあ、望んだんだけれども

「俺の名前はハヤテ。日本から来た。」

「私はシェルティ。同じく日本から来た。」

「俺行く当てないからここで一緒に旅しねえか？」

「大胆な奴。」

「いいのか？」

どうせ一人でも暇だしねえ
いつか。

「いいよ？」

「じゃあ。関係を決めるな。」

「うん。」

「俺の使い魔になれ！」

「えええええ！」

で、現在に至るわけです。
もちろん。答えは・・・

「いや。」

「俺のほうが強いだろ？？」

「人間の能力50000倍の1000倍の能力プラス魔力を持つたこの私に勝てるとでも？」

「ぐつ！！で、でも俺は、戦の神として能力を3000倍まで引き上げている！」

「普通の人間の能力から？」

「そうだ。」

「私は50000000倍、ぐらいの能力だけど？」

「つ、強！！」

「ふ。」

『美の神様つてすごいな。清流とやらよ。』

『まったくだ。ムーンよ。』

『』

それぞれ雑談しちゃつてるし・・・。

「で、もう力関係で行くね。」

『『「え・・・。」』』

「文句アル?」

口だけ笑

威力絶大!

こうして新しい仲間が加わったとさ

新しい仲間（後書き）

学校つて、キーキーひむさい先生いるんですよね・・・。
行きたくないです。

と、まあ。うん。気にしないで

シェルティ「宿題は？」

亀「なーんのことかなー」

シェルティ「やつてないね。そつだね。はいやるよ。」

亀「は、はい。」

てなかんじで、学校の宿題やつてます。計算ドリル2ページ分を2回
うええええん

まさかの展開ばかりです

s i d e シ ル テイ

今、笑つてます。

怒りといつ影をつけて・・・。

「な～んでこ～なるかな～？」

「さ、さあ？」

新入りこそハヤテが私の保存食（500年分）を食べやがったのです。

一切れも残さずに・・・

s i d e o u t

s i d e ハヤテ

（朝）

「あ～腹減った。飯！」

「・・・」

ん？こいつ誰だ？

う～んと、

たしか、昨日神になつて落つこちるーとか言わされて、落つこちて、

そこで、こいつが下にいて、

そして、疲れて、龍の上で寝て、

あ～そつか、

こいつがシェルティで、
今乗っているのが清流。

あ、シェルティの寝顔子供みたいで可愛い。
思わず抱きしめたくなるよなあ
あと、魅力ありすぎるし・・・。
つて、何考えだ！俺！

いまは、腹の虫を何とかするのが先決だろー。

「ん~っと、あ、あの袋なんだ？」

開いてみる。おお～肉と魚と野菜がた～くさん
たべよう！たぶん朝ごはんだし！食べても大丈夫だろう

「いただきます！」

がつがつ。

ふ

完食！

「んあ？おはよー。」

おお～寝ぼけ顔。

可愛い・・・。

いやいや。そりじゃなくて・・・。

「おはよー。」

「・・・！」

「ん？どうした？。」

あれ？シェルティの顔が見る見るうすに青くなつていくんだけど・・・

。

もしかして、食べちゃまづかったかな?

「あの袋の中に入っていたのをたべた?」

「うん。」

「全部?」

「うん。」

で、現在に至ります。

顔！顔が怖い

ははははは

「私の保存食500年分を……返せ…………。」

「『1』めんなさい~~~~~」

ホントスマセン。
どうじょひ

「1」ひしても始まらない。食料は何とかするとして……。あ、
あの船なんていいよね。」

なこするきですか？

あ、分けてもうのですね
でも、海賊船ですよ？

「――ヤヒ」

襲ひのですか？

そんなわけないでしょ？

だって、美の女神でしょ？

「さて、食料分けてもらつてくるか。」

ほつ。

襲うのではなかつたんだ。

「いくよ。」

「はい。」

て、俺いつの間に敬語？

side out

side ラルティ

ふふふ

さてと、この船の食料分けてもらいますか。船ごと

「清流！下降して。」

『承知した。』

さてと、ついた。

「ん？なんか降りてきたぞ？海軍か？もしくは俺達のところに入りた
いのかよい？」

変な誤解するな。

クルー1

「あの～私は、そのためにきたんじゃなくてえ。食料を分けてもら
いにきたんですう。」

ぶりっ子モードで突入

これで男達は少なくとも聞いてくれる・・・分けないか

「食料？あいにくないんだよい。」

やつぱり、こんな小船じゃないか・・・。
乗ってるの一人だし・・・。

「んじゃあ、どこに行つたらぐれるの？」

「俺達の、船よい。」

「どこにあるのでしょうか？」

「まあついて来いよい。」

「はい。」

そして、私達はついていった。

のはいいものの。え？つきましたよ？

白ひげの乗っている船に・・・。

なんか聞いたことある口ひげつかと思つたら・・・。

マル口？

そんな感じの名前の人だったとは。
ついてない

「ぐりりり。息子よ、こいつたちは？」

「俺の船に落ちてきたよ。」

あ、清流はついたときにすぐ額に入れました。

「ぐりりり。お前達のなは？」

「フードとれば分かると思ひ。」

そういって私はフードをとった。
一同騒然。

「ぐりりり。粉雪のショルティか。」

「そうだけど。」

分かつてなさそな
ハヤテに耳打ちで私が六億の賞金首だとこいつことを告げる。
もちろんビックリしてた

「男のほうは？」

「おれは、は、ハヤテだ。」

がくがくしてるし・・・。

そりやね、こんな大物だしねえ。

私？私は免疫あるから大丈夫

「おまえら、俺の子供になれ。」

「断る。それより食料を分けて船もほしいんだけど。」

「ぐらりん。面白い野郎だ。食料はやろう。だが船は……そうだな、ここで一週かん暮らしたらやうに。」

「わかった。」

ハヤテよ……。

もう気を失う直前みたいな状態だな……。
まあしかたがないのだけれども……。
はあ、大変なことになつた。

おわかの展開ばかりです（後書き）

シェルティちゃん白ひげにつかまつてしましました。

暮らすのだそうです。

エースに会えるかな？

多分会えるとは思うけど・・・。

あれ？何で私は最初思っていた展開とはまったく別の展開についているのだ？

誰か戻してくれ〜

（自分で戻せ）

side ハヤテ

なんか勝手に暮らすことになつてゐしー。
てか六億つて・・・

どんなことしたん???

いやいや。暮らしたくない!!!

だつて怖いじyan!

あの白ひげのところに

一週間だよ?! 一週間!

もう気を失っちゃお・・・

side out

バタリ

side シュルティ

ん?

ハヤテよ、『れぐら』のことで『氣』を失つなよ・・・。

「ぐりりり。もつ氣を失つたか。」

「ほんと、やわなんだから。男の癖に・・・。」

「ぐりりり。まあ飲め。」

「酒?」

「そうだ。」

「まあちよつとだけなら。のんでやつてもいいよ。」

「てめえ、よく親父にそのようなことを・・・。」

「いいんだ。」

「でも親父。」

あの~

私の存在忘れないで下さる?

霸氣だしますよお?

いいんですか?

「ま、のめや。」

お、もどった。

「しかたがないね。」

私は渡された、酒をのむ。

「ふむ、いい酒だね。」

「だろ?」

「さて、わたしは『ショルティー!』?」

「 「？」」

いま、エースの声がしたような・・・。

「エースさんのお帰りだよい。」

「ふ〜ん。」

「ぐ〜り〜り。もう帰ってきたか。」

やつぱいるんだ。

てか白ひげ倒すとかいつでなかつたつけ?
ま、知つてたけど。こうなることは・・・。

「シェルティも白ひげ海賊団に入るのか?」

「私は海賊にはならない。」

「なんで?」

「いろいろめんどくさくなるから。」

「おま・・・。それだけで?」

「それだけ。」

「で、その男は誰なんだ?」

・・・。

伝えたら怒りそうだなあ。
でも心広いから大丈夫か・・・。

「ハヤテ。空から降つてきて今旅をともにしている。」
「・・・。そうか。」

やつぱ心広いな~

「ぐ〜り〜り。お前ら知り合いか?」

「「幼馴染」」

「Hース。この女は今日から一週間ここで暮らすんだ。」

「えええー?」

「ぐりりり。」

よく笑うな

「シールティ。」

「なんだ。白ひげ。」

「お前の部屋はマルコが案内してくれる。」

「わかった。ハヤテの部屋は?」

「俺の息子たちと同じ部屋だ。」

「りょーかい。」

さてと、マルコを探すか。
おーーいたいた。

「マルコ。」

「ーーーひおひーびくじしたよい。」

「部屋案内して?」

上田すかい

白ひげにやつても無意味だしねえ

「わかった。」

「で?どこへ?」

「Hーだ。」

近ー!

ま、いつか。

「マル」「セ～ン。」

「お、エース。」

「シェルティ借りてもいいですか？」

「エースの女だったのか。」

「まあ「ちがう・・・。」

肯定される前に言つておく
え？ 肯定じゃないかもって？

たぶん肯定するだろうと思つたし・・・。
え？なぜ分かつたって？

感。

で、エースに連れられ。人気の少ないところきました。

「シェルティ。ハヤテとはどうやら関係なんだ。」

「旅のお供。下僕。」

「・・・。そうか。」

「エースは？ 何で白ひげのところ乗つてるの？

「親父が思つたよりいい人だったから・・・。」

「んじや。結婚の話はなかつたことで。」

「ちょ、まてよ。」

私は席を立とつとした。

が、呼び止められた。

まだなんかあんの？

「なに？ 六億でも用意できたの？」

「いや。用意できていけど。でもなあ。俺には新しい夢ができた
んだ！」

「どんな？」

「親父を海賊王にする。」

卷之三

「だからそれができたときに。お前と結婚するからなー！押し倒してもー！」

こわいな

ま、一生来ないけど。作品道理にいつたら・・・。

「わかつた。期待してるよ?」

よにいう天使の微笑み的な感じで微笑んでみた。

卷之三

ל' טהנתן

「え・・・。」

さてと、海に潜りますか

「白ひげに食料調達していくつて言つて。」

「うんわかつた。つてええ？」

二九〇

バシャーン

あ
！
！

海王類だ！

しかも超特大の！！

うし。

パーんち

頭蓋骨砕けたな。

後はこれをもつてあがるだけ。

「ショルティが、海に食料調達に行つた?」

「ああ。」

「そりや見ものだ。エース。どこで落ちた?」

「あこで落ちたんだが・・・。もう30分あがつてこねえ。」

「――!――!――!」

「誰か助けに行つてやれよ。」

「わかつた。一番泳ぎが得意な俺が行く。」

「おう。たのんだぜ。」

うつるさいな

あ、そうだ。

これもつて違つといろで出て驚かそう。

誰もいないとこひであがつて。私なりに調理する。うん。完璧

「いなかつた。」

「ええ? まじかよ!」

「どうするんだよ!」

おーおー

いつてくれるじゃないの
よし、そろそろ驚かそうか

「私ならここにいるけど?」

「――!――!――!ええええええ」

「料理できるから。たべて。」

「 「 「 「 「まじか」 」 」 」

盛大な晚餐がすぎ、何も残らず
私は眠りについた。

一 田畠（後書き）

いかがでしょうか。
できれば感想とかよろしくお願いします。

side ハヤテ

うん
頭が痛い。

あれ? ここどこだ?

あ、そつか。俺倒れたんだっけ

白ひげと一緒に一週間暮らすという事実が発覚して。。。

まあ、シェルティのためなら。。。

つて、何考えてんだ! 俺!!!

相手はあのシェルティだぞ!!!

どんな相手でも一瞬で落ちてしまうあの最強の神でもふられた相手
をだぞ?

むりむり!

俺なんか。。。

でもな)

以外に脈あり?

つて! すきでもないのに何考えてんだ!

シェルティがいてくればほかなんていらないね

うん。

あら?

俺狂つてきた?

もう一回寝て。。

「おやおよ!」

ええええ!?

マルコさんんんん!?

「お前の仕事の皿洗い、洗濯、掃除ができないよ。」「あれそんなことやつたことないからこよー。」
「いや。」

怖いです。

たとえ能力1000倍にしても勝ていつしょ。
だって不死身だし・・・。
え？ 悪魔の実の能力無効にできるだろって？
あ、それ。
女神しかできないんですよねえ。
しょぼいなんておもわないでよね・・・。
できないんだもん。

「速くこいい
「は、はい！－！」

ええええええええええ！
これ全部ですか？
この部屋いっぱいの洗濯物。
むりっす。
だって洗濯機ないんでしょ？
手洗いなんでしょう？
むりむり。

「ちなみにこれがお前がやらないとシェルティがやることにならぬぞ？」
「やります。」

やらなきやな。
シェルティのために・・・。

べ、べつに好きだからとか思っていないんだからなー！

s i d e o u t

s i d e シールティ

うん
ねむい
でも起きなきゃな
ここ白ひげのとこだし。。。
ま、なんとかなるっしょ

「さてと、何すりゃいいのかな?」

あ、マルコ

「マルコ~。」

「。。。なんだよ。」

「仕事つてない?」

「

「あるよ。」

「なに？」

「洗濯。まだハヤテが終わってないんだよな。」

「え、手伝わなきゃ。朝ごはん食べられないじゃん。」

さてと。

気配探知機。

あ、これは精神を集中してあいてのナホコをさがすことができる優れたもの

あ、いたいた。

「ハヤテ？」

「え、なに？」

「なにその大量の洗濯物。部屋いっぱい！」

「俺の仕事だから。そこまでまつて。」

「意外に優しいね。紳士的？」

「よ、よけいだい。以外には・・・。」

「ま、どうでもいいんだけど。私の朝ごはんが遅くなるのは嫌だし、さつさと終わらせる。どいて。」

「えつ、ちょ・・・。」

「いいから。」

「・・・。はい。」

「うん、えらいこいだらう。」

頭をなでてやる。

恥ずかしそうにかお真っ赤にしてむづむづしている。
れて、洗うか。

「水さん、水さんこれを洗つてくださいな。」

と、水を操って洗う。
え？どうやって洗つたつて？
気にしない気にしない。

「風よ。乾かせ。」

風で乾かす。

「たため〜。」

物を操つてたたむ。

「ふ〜完」。

「お、お前どうやって・・・。」

「気にしない気にしない。気にしたら負けだし。」

「は、はあ。」

さてと、洗濯終わつたし、『飯もらつて』よ。

「マル口〜。」

「え、呼び捨てにしてんの？」

「当たり前。私より弱いもん。」

違う？

だつて、私には能力無効にできるもん。

「なんだよい。」「おわつたし、『飯頂戴。』
「ほんとかよい？」

「わたがうわけ？」
「まあいいよ。」

「「」はん。」

「はいよい。一人分。」
「ハイハヤテ。」

「あ、ありがとう。」

ハヤテになんかものすゞぐボリュウムある朝食を渡す。
「

何で赤くなつてんの？
ま、いつか。

「「」いただきます。」

朝食を食べる。

清流額に入れてるから、どんどん入る。
5分で、終わつた。

「「」じちぞうさま。」「
「やけに速いよ。」「
「うん。」「
「そしてやけにシンクロしてゐ。」「
「そうちかな？」「
「いや違うだよ。」「
「もういいよい。」「

そして、皿。

私は海王類釣りしている。
え？ 何でつて？
暇だから。

「お、かかった。なんだ小物じやん。」

「え、どれどれって、でか！！！」

「え？ だつて100メートルだよ？」

「十分でかいって。」

「これを料理長らしき人に見せて。そして夕飯にする。」

「・・・」

夜。

やけに豪華でした。

そりや海王類つてだけアルよねえ

そして寝る。

何でこんなに速いかつて？

暇でなんもなかつたから。

「メントべだれこ。

白ひげ滞在期間、終わり

s i d e ショルティ

3、4、5、6、7日目です。

何でこんなに速いかつて？

はい。なんもなかつたからです。
え？

あ、はい一個ありました。

なぜか、白ひげ海賊団の隊長＆今まで言つ黒ひげ以外の人には告白されました。

もちろん全部断りましたよ？

なぜつて？

後々面倒だからです。

まあさておき

今日で、食料＆船もりえんぞ～！！

やつた～

「ぐら～り。本当に俺の息子にならないか？」

「私女。それに、後々めんじくさいからヤダ。」

「ぐら～り。まあいい。船をやろひ。ほりよ。」

・・・。

船投げないで下さい。

まあ、片手で受け取つたけどね。
ん？

こ、これは・・・！

普通の船でした。

ルフィが最初に乗つっていた船みたいなものです。

自分で作ったほうが速かった。
まあいい。

「食料は積んであるからな。」
「わかつた。んじゃ～ね～。」

「「「「「おれたちも・・・。」」」」」

あのねえ

あんたら（白ひげ団の皆さんです。）いかげんにせよせ
いちどいったるう？
いまきげんわりいんじやわれえ
ん？なぜって？
朝早くたたき起しあれたから。
(あと作者が疲れてるからb/s/作者)

「却下。」

「「「「ガーン」」」」」

「いこ？ハヤテ。」

「お、おひ。」

side out

s i d e ハヤテ

シェルティ

何でそんなに怒ってるの？

そりや、朝、マルコさんが叩き起こしたって言ってたけどさあ
俺、そこまで根に持たないよ？

唯一の助けが、俺に怒りが向いてないことだけど・・・。
後で怒りがコツチに向くかも知れんな。

氣をつけよつ。

「いー? ハヤテ。」

「お、おう。」

く

可愛いぜ！

下から目線で、微笑んで、

男子キラー並だな。

本人は無意識でやつてるのだろうけど。

こりや、俺が恋人！

つて主張できるような、そんな男になりてえ

俺達は船に乗り込んだ。

シェルティが片手でつかんだ船に・・・。

「ぐいりり。気が変わったらいつでも」ことよ。

「おれたちも待ってるからね~」「」「」「」「

「絶対行かない。」

ほ、よかつた。

つて、何で俺が安心してるんだよ！

まるで好きな人を思つてるみたいに……

お、俺は別に好きなんじゃないんだからな……

そう思つてこいつにもう白ひげの船が見えなくなつた。

「ねむい・・・。」

「え?」

「おやすみなわこ・・・・・。」

「ええ?」

シェルティイは、俺のひざで寝てしまつた。
ど、どじよひ。

でも、なんかうれし・・・つてーーだから何で俺が「こんな」と思わ
なきやいけないんだ！

俺も現実逃避しそっかな。

今も俺の力。

つまり、神の力のことまだ分かつてないんだし、
こここの世界のことも・・・。

ちよつと、昔のことでも回想してみよつかな

白ひげ滞在期間、終わり（後書き）

更新遅れてしまつて申し訳御座いません；
なんせ巫女の舞の練習があつたもんで、遅れました。
たまに遅れるかもしねいですが。

温かい眼で見守つてください。

あと、文がやばいですが。
ツ気にしないで下さい。

ここに人気ランキングを作りたいと思います。
え？なぜって？

気になるから

? シエルティ
? ハヤテ
? 清流
? 夜
? エース
? ルフィ
です。
どれが好きですか？
感想ください。

ハヤテの過去

sideハヤテ

ワンピースに来る前の名前ってなんだったっけ・・・

あ、そうだ

風早 疾風

だった。

俺はどんな奴だったっけ。

なんか女子にキャーキャー騒がれてたっけ・・・。

それに、好きなやつもいたな、

月森 夜華

っていうやつで、容姿も、何もかも普通だっただけど優しいんだよな、そして我慢強くて、心が綺麗だった。

たいてい俺の周りにいるやつは心が黒かったり、自分のこと棚に上げていい奴とか、たまに違うやつもいるけど・・・まあ全部いつもくつついてくるけどな。

でも夜華はちがった。

何しても俺のこと好きになってくれなかつたし、

最初は面白半分にやつたけど、アイツの誠実さや優しさを見るたびにどんどん好きになつたいたんだ。

そういうやシエルティって夜華に似ているよな・・・。

容姿とか体形・・・まあ体形は似ているけれども、なんかオーラみたいなものがな・・・。

起きたら聞いてみよつと。

それにしてもうひとつ、起きてこむときも可愛いけど寝たらまた一段と可愛いな。

いやいや。一般的な感覚で見たらだぞ。俺的には夜華のまづが可愛いだけだな。

そひひ辯違えるなよ！

「ん・・・・・。」

「？」

「風早わ・・・ん？」

「いや、まああつてるけど？」

「じゃないよねえ、いたら逃げなきや。」

「なんじやそりや。」

たしかに、追いかけたりしたが？

そんなにしたか？

一週間だけだったのに・・・。

「あ、私何言つてるんだろ？・風早わといたらけり日本だしねえ。
」とにかく眼を覚ませう。」

多分これにはいつもとおつ寝ぼけているんだろう

説明しよう！

シェルティは朝に弱いのだ

そのまんまだな

ま、いいとして

眼が覚めたみたいだな。

・・・・海水かぶってたし

つてかちょっとびしょぬれで口――――――

軽く透けてるのが口――――――

まあ、マントが透けてるだけなんですけどね。

つち

「で、話つて？」

あ、もう乾いてる。
はや！

「あ、え、つと。あ、そ、うそ、う。」

「？」

「シェルティって、ここに来る前どんな名前だった？」

「月森夜華。」

「お、一回呴らせて？」

「だ、か、ら、！、つ、き、も、り、よ、か、！」

! ? ? ?

「うるさい！ あんたは？」

「風早疾風。」

「そのまんまだね。」

卷之二

ま、まさかの月森夜華だったとは。
道理でオーラが似ている。

「で？ほかには？」
「俺のことすきか？」
「疾風のほう？ハヤテのほう？」
「疾風のほうで……。」
「普通。」

ベリーナーなどに行つたな。

「ほかには・？」

「今の俺は？」

「普通？」

?がついた!

え、どうしたことなんですか?

俺期待しちゃつてもいいんですか?

好きになる見込みがあるって……。

「まあ、もつと使える奴になってくれないと、好きになんないかもね。」

「別に俺はお前に好きになつてもういたいわけじゃないんだからな・・・。」

「ま、どうでもいいけど。」

「いいのかい。」

俺つてシンデレlenaのか?

いまさらだが。

ま、いっか。

おれはこのままこの生活を楽しみたいわけだし、今は気にしなくっていいか。

「おやすみ。」

「またか!! まあ俺も寝るからこ^{トナ}ナビ。」

明日、なにがあるかな。

また新しい仲間が増えた

s i d e シ ル テイ

私は朝に弱い。

なぜなら、膨大な眠気と戦わなければならぬからだ
ほつといたらたぶん一田中寝てゐるであろう。

そんな私をいつも起こしてくれるのは・・・

ハヤテだ。

起こし方が「布団」（海王類で作つた）をばぐという方法で
まあそれでも起きないから眠気を覚ますために海水がぶつてんです
けどね。

今日もそういう起こし方をへらつた。

そして、海水をかぶつた。

あ、マント着るの忘れた。

マント着ないと海水で洋服が透けて見えて恥ずかしいのだけれども、

「おま・・・。」

見られた。

速く乾かさないと。

「光よ早く乾かして。」

ふう。

かわいた。

「ハヤテ、見たでしょ？」

「だつていきなりやるからだろ！」

「まあ見られたもんはしょうがないか。」

しょ「うがない。

一回田だし。

次ぎやつたら殺すけどね。

「みやー。」

ん？なんかひざに乗つてる。

なんだこれ。

「なにこれ。」

「しらねえよ。」

猫さん？

「あ！…おまえか！」

「だれ？知り合い？ハヤテのペッタ？」

「秀吾か！」

だれですか？

「ほらー！おぼえてねえか？同じクラスの栗山秀吾ー。」

「えつと…・・ああ！」

あの王子様達の…・・

あ、王子様つていうのは、学校で1～5番田にかつこいい人のこと
栗山さんは2番田ね。

ハヤテは1番田。

「で、なぜ猫？」

「みゅー。」

「喋れないの？」

「みやー！」

栗山わんは、うなずいた。

「あー！ 神が猫になつた場合誰かとキスしちゃつていた。」

「ハヤテ、あんたがしろ。」

「えええええええええ！」

わたしはいやだからね。
やりたくないからね。

「か、神が、女どじやないと無理だつて・・・神の。」

「私神だし。」

「だからだろーーー！」

え～～～～

やだ～

「みやあああ」

栗山さんまで登つて訴えてるし、
たすけて～つて。
ま、もういいや。
やっつけえー！

「わかったやるから。」

「やつぱりな。」

・・・。

やれつていつたのあんたですよ？

ハヤテさん

「みゅ・・・・。」

じぶんでやつた！

この猫・・・じゃねえええええええ・・・・・・

「もひつた・・・・。」

黒田黒髪で背が高くて一般的にはかっこいいのかな？
ただ、猫耳と尻尾がついてるけど

「おまえ、なまえは？」

「だから秀吾。」

「この世界での名前は？」

「はあ？」

「このワンピースでの世界の名前は？」

「いやこの日本だろ？」

「日本にこんな美人いるかよ……。」

用意つて私を指差す。

「いやいや、そんなに美人じゃないし……。
んじゃあ、俺の名前はシユウな。」

何で男つてこいつのこいだわらないんだから？

ふしきだ。

「おれは風早疾風。こっちではハヤテな！」

「わたしは月森夜華ね。こっちではシェルティ。」

「夜華ちゃん？！」

「あ、はい。」

「おい！ハヤテなにこの夜・・・じゃなくてシェルティと抜け駆けしようとしてんだよ！」

「俺のほうが強いもん！」

「なに？おれはなあ！獣の神なんだよ！聖獸は火の鳥だしーのうりょくの5000倍にしてもたつてるんだよー。」

「何で戦いの神より獣のほうが上なんだよー。」

「しらねえよ！』

あ～も～「るさいな。
清流出してとめても、あらぬ。

「あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、我の前に現れよー！」

「おおきくなあれー！」

『よんだか。』

『なんだこれ！』

『久々に出て來た・・・。』

『とまつたし、戻つていいよ。』

『なんなんだ』

また清流が額に戻る。

「「なんやかんやで、一番強いのな。シェルティって」「
「ありがとう。」

ま、また一人増えたけど状況は同じだろうし・・・。

夜

え、時間の経過が早いって?
気にならない。
気に入ったら負けだよ!
暇だつただけだから。

「で、俺はどこで寝ればいいんだ?」「私はどこでもいいし・・・暖かいとこりだつたら。」「

寒いのです。

なぜかはしらないけど・・・。

「あ、シユウ。」

「なんだ?」「

「猫になつて!」

「なぜ?」「

「いいから。」「

「 しょうがなないなあ。」

ふふふふ。

抱き枕＆カイロがわり～

「 なつてやんねえ。」

「 ええええ！？」

「 いいじゃんか。体温が37度あるんだし。」

うし！

「 これならいけるでー！
でかいけど・・・。」

「 ハヤテも寝よ？」

カイロがふたつ～

「 ああわかった。」

「 シュウの寝転んで。」

「 あ？ うん」

「 で、私はその間にはこいつて、ふとんかけておやすみ～」

なんかシュウ＆ハヤテが眼を真ん丸くしてるけど、ま、こいつか。

シュウを抱きしめて、おやすみ～

ん？

なんかシュウもコッち向いて私をギュッとしている。

あ、そのまうがあつたかいかも・・・。

あ、ハヤテもギュッとしている。

あつたかい。

おやけみ

また新しい仲間が増えた（後書き）

感想ください・・・。

無い！！（前書き）

やつと感想きた～～～～
どれどれ？文に幼さが出ている。
なおせません。

どうやって直せばいいんですか
経験浅いって罪だねえ

あ
で
も

ししむらなしひ

第六回

これは個人の感想なので気にしないで下さい。
では短いのですがどうぞ！！

164

無い！

Sideシェルティ

朝です。

布団をはきにくんな……！

「お~お~うう~!~」

「Z
Z
Z」

あれ？もしかしてシユウもお寝坊さん？

しょうがないなあ

起きてやるか・・・。

今田はマンテれるのを忘れてないし、海水がぶつて・・・冷たい。

「ねえ、ハヤテ。」

「なんだ？」

この海水って何度?』

- 0

「何でこんなのかふざてしまつたんでしょうか？」

体強化されて・・・・

なかつたらどうじょうか

卷之三

「 」

おそい！

人のこといえないけど！！

でかこのことよく人陰々でくるな
しかもクラスの人たちばかり！

ま、おじといて。

おみそり

おみそしる

ないね。

樽間違えた？

ないね。

。 他の詠吟料は

な い ！

なんて！ なんてなしの、

ない。

え？ ええ！ ？

つかつてないやうね？？

「なん、可でお金ばーの？」

「たまへ」

「かせぐよ・・・・。」

かせがなきやね

お米もみんなないんだもん。
調味料も。

「…………えええええ！――――――！」

なんもなしだ

「毎庄通志」

「むりです。」

わはした」とねえしてなんでしわせなしよ!! 私がわはぐか

「樂がたばれ」

こうして荒稼ぎが始まつた

準備（前書き）

ちょっと甘い？かもしないです。
長時間放置してスイマセンです。
これから合宿なのでしばらく更新できません。

side シールティ

私は釣竿・・・
も、ない
餌・・・
も、ない
私は水着・・・
も、ない
も、ない
鈎

も、ない
どうすんの?

「なあシェルティ。」

「なに?」

「鈎は?」

「ない。」

「てか釣竿・・・」

「ない。」

「網。」

「ない。」

「どうすんの?」

「素潜りでとる。」

「いやむりでしょ。」

「あんた、神を覚醒したらできるでしょ! 一戦の神でしょ! ?」

「シユウ~。」

「俺一応猫だからできない。」

「そなんあ。」

「シールティは？」

「美の女神ですけど？な・に・か？」

「はい。ぼくやります。」

口論で勝つには適度な押しはあるのみ！

自論です

そういうて、ハヤテは何かしら呪文を唱え始めた。

「俺の力！覚醒！」

そのまんまだな～

やっぱ男子ってこういつのにとらわれないタイプ多いの？ねえ？
あ、ハヤテの姿説明

髪が私と同じく銀で目も銀で服がいかにも神です！ってかんじ。
そもそもかなりの美形だと思つ。

私から見てもきれいだと思つ。

なぜか見惚れてしまった。

そして私を見てむすつとした顔のショウも呪文を唱え始めた。

「俺の力・・・覚醒！..」

おなじですかああああ？

男子つて（以下同文）

シユウの姿説明～

髪がこちらも同じく銀で目も銀で服がいかにも神です！って感じ。
こちらも美男子

猫耳まで銀になっている・・・。

ねえ？これは元がいいからなの？何でこんなにかつこいいのよ！..

なんか私だけ普通で置いてきぼり食らつてるみたいだったの

「月夜のじぐく舞い降りよ、覚醒」

ふ、じうよ。

彫るかに効つている私の美貌をとくとみよ！
ふはははは

「…………されいだ。」

はい？

え？え？なんぞじうして？

あ、そりや美の女神だからきれいだとおもいますよ。
でも地があたしじゃね～

宝の持ち腐れつて言つか……
で、海王類は？

「とつてきだぞ！」

はやつ！

なんかシユウもとつてきてるし…

むりしなくていいよ

二人合わせて10匹もいるから……。

さばくのたいへん！

「……さばいた。内臓で袋とか水筒とか作つた。肉は乾燥された
のと、ソーセージとハムをつくりた。
皮で洋服作つたからそのうちの一枚やる。」

すい。

そこしおできないていつてたのに！

す「」こす「」こ…

じこせしょうじきじこつてみよつ

「す「」こ。す「」こよー・シユ・ウー。」れは「」褒美上げなきやー・なつかい
つてみ?なんでもあげるよー。」

れこ「」は、まあ、す「」こ」とやつてのけたからの「」褒美

「おれはあ?」

「あんたは普通だしー・つまあ誉めてあげる。」

「何その上から田線。」

「実際一番下だから。力。」

「何も言い返せねえジャねえか・・・。」

あ、いいすぎた?

なんかめっちゃくじこんでる。

あ、なぐさめまきや

「」めん「」めん。廻り過ぎた。なんが「」褒美上げるから?ね?なん
でもいいからね?」

やつぱ一生懸命したのに「」褒美もりえなつて悲しいよね。
「めん。それかなかつた。

「」褒美。つてなにをいえば・・・。」

なんでもつていつたよね?・
・・・。

「わかった。」いつからするから。」

私はハヤテ＆シユウに抱きついた。
そして二人の耳元で

（ありがとう。とてもたすかつた。）

と、いった。

二人は、顔まつつか。そしてフリーズ

「さ、ここで商売するよー。」

わたしは、近くの島を指差した。

商売開始

side シールティ

暑い太陽

さらさらの砂漠

そして、体から水分が抜けていくところ

アラバスター王国

ん？

なんでみんなへばってるの？
私全然平気。

水の魔法かけて常に潤つてますから～

男の神つて使えないのかな？

この魔法。

あらら？

あんなとこに町がある！

そこで商売しようウ

「あこで商売するからがんばって。」

「「あ～い。」」

ホントに大丈夫？

まあ、一応魔法かけとくか

熱中症とかになつたら困るしね。

「水よ、潤せ。」

「ええ？なんか涼しいぞ？」

「涼しい。」

「あと少しですよ。」

そう、この魔法はあまり持たないのだ。

もってせいぜい一時間

今は30分目

ひたすら歩く歩く

とまらずに歩く

そしてつきました。

・・・。

なんかみたことある人たちがいるんですけど・・・。

鼻が長い奴と麦わらの奴とマリモツっぽい奴と眉毛がくじくじの奴とあと髪が青色の奴と・・・。

はい。

麦わらさんたちでした。

見つかるとやばいな

一応顔変化の魔法かけて、蛇姫様の顔にして、商売開始！

「えへ、海王類の肉いらんかね～。服もあるよ～。」

こんな感じでいいかな？

あ、断りなしに商売開始したからなんかおうおうしてこる。

ハヤテたち面白～！

「あ、これ下さい。」

なみさあああああん！

「はい。五千ベリーになります。」

「高っ……」

「わかりましたよ。」「ベリーになります。」

「買います。」

「まいどー。」

は～

値段決め解けばよかつた。

お?

こんどは?

エースですかあああああー

「この肉10?ぐだわい。」

「五千ベリーになります。」

「買います。」

「まいどー。」

的な感じでじんじんたまるたまる。

あ～便利だ。

ありや?

もうなくなつた。

な～んだ。つまんないの。

さてと、当初の目的だった調味料を買いにこきますか。

とこりことで、お一人さんにはお留守番してもらいましょう。なぜって?ナンパされるのはもう二つ二つだから。二人には顔変化の魔法かけれないしね。

「お留守番コロシク。」

「「わかつた。」」

な～んだ

聞き分けいいじゃないの

れひと店探しに行きますか。

みつけました。
なになに?

「強い店」

なんじやよそりやああああ
入つてみよつかな
いや、でもこんなときは入つたらだめなんじや . .
いやでも~~~
く~つ
い
な!」
「こひつしゃい。まわは私と戦つてかつたら好きなだけひっこ

なんてきまえがいいの！
やります！

むかつくー

s.i.d.e シールティ

「やります。多分あなた私に勝てないだろうけどね。」

「それをそのままそっくり返してやるよー。」

「そつくり返したら私が勝負売つてるつてるみたいじゃないでですかー！」

「そんなんどうでもいいよー。まやくはじめるよー。」

つたく。

なんで、わたしが、
こんな「スプレしなきゃなんないのよおおおお
しかもなんで巫女装束?
意味わかんないし!

「はじめるよー。」

・・・。

武器つてあなただけ持つものなんですか。

私にはないのですか

はあ

わかりました。

やりますよ。

「桜!」

敵が私に向かつて無数に剣を振るつ
そんな技です。

敵さんですよ。

「ただの足蹴り」

そのまんまですよ?
え~っと

私が避けて間合いで詰めてわき腹にけつただけですよ?
なのに・・・

何で死に掛けになってるんですか?
私、海兵にまた追いかけられるじゃないですか!

「あんた。やるね。約束だよ。好きだけ持つていきな!」
「やつた!」

そういうて

片つ端から取つていく

私が通つた後には調味料一切無し!
ビンビンと無し!

「はははは。」

あれ?

敵さん狂つた?

「いや~見事なもらいつぱりだね。気に入った。私の証明書上げる
からいつでもおいで!。」

「え? あ、ありがとうございます。」

狂つたね~

ちゃつかり返事してなんか『テ』『テ』のピンクのカードもひつただけど。

ま、いつか。

side out

side シュウ

まだか、夜華・・・もといショルティは
ここまでまつてて
なんていうから仕方なく待つてたのだから
おそい！
し、しかも

「ねえ、あなたのなまえは？」
「どこからきたの？」
「私と遊ばない？」

なんなんだこの、
女に囲まれた状態は！
ハヤテも巻き添え食つてるし！
ここでもこうなるのか
まあ、徹底的に無視してるけど・・・
速く誰か助けてくれ〜

side out

side シルティ

あ、やばいやばい

速く帰らなきゃだめだつたんなつた

「ん？ あこいつて何であんなに人が集まってるの？ って、あこいつてまさか・・・ハヤテたちがいた場所だよね？」

いつてみよう。

「ねえ、あそぼ～よ～。」

「うせえ。」

「あそぼつてばあ。」

ん？

今、シユウの声がしたよつな・・・

「ちょっと失礼。」

人混みを書き分けて進む。
あの猫耳は・・・

「シユウとハヤテ？」

「遅いー・シェルティー！」

「『めん』『めん。』

「ちょっとお。」

「なんですか？」

「『』の人たちはあたしのなのー私の会話邪魔しないでー！」

なんなんだ。

この女の人は！

しかも何気に私より胸でかいし！

む〜か〜つ〜く〜

「この人たちは私の下僕よー気安く触らないで。」

「はあ？」

「ね？」

「は、はい。」

いくよーといわんばかりにひつぱつしていく
そして、どんどん引っ張つてつて私達の船があいてあるヒルヒル
いた。

「なあ、なんでこんなとこるい・・・・・・

「はあ、むかついた。」

「「え？」」

「なんでもない！」

私よりスタイルいい人なんて許さない！
始めて私に黒いものが生まれた瞬間だった。

みんなの守護獣と額の獣

sideシールティ

「あ～も～！～。」

「「どうしたんだよ？こんじは。」「

「ちょっと嫉妬しただけ。」

「「何に？」」

「あんたらに言つてもわかんない！」「

乙女心なんて男子に分かるわけないでしょ！
もう！

私つてやつぱスタイル悪い？

いや、一般的には悪くないけどね・・・
いきすぎてもだめだしなあ

「なあ、シユウの額にはダイヤのマークがあるよ～

「あ？ 狼犬。」

「じゃあ額に入ってるのは？」

あ、シユウの額にはダイヤのマークがあるよ～

「ねずみ。」

「・・・普通だな。」

「悪かったな。」

ほえ～

狼犬とねずみなんだ。

初耳だ。

「おまえは？」

「え？ 僕は守護獣はペガサスで、額にはゴーラーンだ。」

「馬か。」

「なんだよ。」

「いや？ べつに」

ハヤテは想像上のいきものか……

「「シユルティは？」」

「なぜこっちにはなしが……。」

「俺たち話したし」

「・・・・。」

「「ほら、はやく！」」

「額は龍、守護獣は虎。」

「「・・・すうじにな。」」

「そりゃどうも」

どうせ私は規格外ですよー

わるかつたね！

どうせ私は・・・・

人外ですよ！

恋なんて必要ないほど強いんですよー

あれ？ なんかちがつかも？

ま、いつか。

「戻るか？」

「んじゃ俺も。」

「・・・・。私も。」

「「「せーの」」

あ、そろつた。

「「召還…」」

「召還。あまたをかける龍よ、わたしの龍よ、今、呪縛を解き放ち、
我の前に現れよ…！」

シコウのねずみは黒色でしかもなんか触つたらじびれそうなほど異
常な電気を発している

狛犬は白色で風をまといている

ハヤテのゴニーローンは白色で角が生えている体は普通の馬。
ペガサスは白色で翼が生えていて、体は普通の馬。
どこまでも普通だね。

「「シユルティだけなんか強そう。」」

「悪かったね！」

もづー

ま、みんなの守護獣とか見れて良かつたよ。

人型になりました

side シュルティ

なんか今日一日怒つてばかりだな
やつぱね

この「」るこうあつたからその疲れがきているのだべつ

「戦だ〜。」

と、部外者さんの声が聞こえた。
私耳いいからね

でも
はい?
なぜ?
なんで?

「そうなの? ハヤテ。」

「ういうに確かめることができるのは
戦いの神、ハヤテだ。」

「ああ。さつきまでいた町で争いが起つていてる。」

「そうみたいだな。剣と剣の重なり合つ音が聞こえる。」

「ええ〜? んじゃあ手を出すのも悪いね〜。」

「「なぜ?」」

前々から思つていたんだけども
よくかさなるな〜

シコウとハヤテの声

いやいや

今思いをはせたいのはそこじゃなくて・・・
え～っと

「」の先の物語を変えることになるかもしないでしょ？それに、
ルフィの経験地のためにも。」

「「そりゃそうか。」「

あ～よかつた

こんな理由で納得してくれて
本当は戦いがめんどくさかつただけだし
それに入目をばからず練習できるしね～

あ～よくないけどよかつた。

「んジャ練習してるし声かけないでね。」

「「わかった。」「

ふう
練習。

まず、詠唱なしてできるようにならないう。

「なあ。」「
「こえかけるな、つて言わなかつた？」
「いや、俺らの守護獣たちを人型にできないかな」とおもつて・・・
。」
「「できるの（か）」「
「やつてみるだけだから。そんなに期待しないでくれ・・・」「
「わかった。」

「おひしゃー。」

シユウ、人型にできたんなら言つてよ。

「んじや、召喚して。」

「「おく」」

「「「召喚」」」

みんないつせいに召喚した。

ちなみにシユウも自分の守護獣人型にしてみたいのだつてさ

シユウがなにやら唱え始める

何になるのかな?
たのしみ

「できた。」

「「どれどれ?」」

・・・。

みんなイケメンだね~

狛犬は耳も尻尾も目ももともと白なんだけど黒になつてるし、なんかマント羽織つているし・・・。

カラスの羽みたいなのが首周りと下のほうについでいる。全体的に黒。髪型はロン毛とショートカットの中間ぐらい、性別は男
ねずみさんは、ロングヘアの女の子で、こっちも動物のときは反対の色をしてて、白いそのガーディアン羽織つてて、服は普通の白い長袖。スカートをはいててこちらも色はしろ。全般的に白だね
夜は、・・・・。こつちも反対の色の黒になつてるし。胸元がしつかりあいた黒のドレスを着ている。

ひじ上辺りまである手袋もしている

清流・・・・・もともと青色だつたんだけどね、反対の赤になつて
るし、服はルフィの着ていいチョッキのボタン無しの前が開いてい
るようないので、下は短いズボンで、虎ガラです。

皆さん、なんでもとの色と反対なんですか？

あと、なぜかハヤテの動物達は人型にならないようで・・・
かわいそうに・・・・

意外な包容力

side シュルティ

「ねえ」

「なんだ？」

「ハヤテの獣達ってほんと人に人型にできないの？」

「できるちゃつできるが・・・。」

「ならやつて？」

「はあ？」

「みたいし！」

「まあ・・・いいよ。」

「おお！」

やつとハヤテの獣達の人が見れるぞ！
やつたあ～

「ほら。」

「え！ はやー！」

ん

ユニコーンのほうは、ストレートロングで、額に角がはえてて、服
は襟のところが肩が見えるくらい開いている長袖のワンピース。色
は全て黒

ペガサスは、ユニコーンの額のツノ無し。

双子？ つてぐらにそっくりな顔

全体的に少し幼い。

こんなでした。

なんか守つてやらなきゃな～つて思つてしまつほど可愛い。

「こんな風な妹いたらな～

「どうせ俺なんて・・・・・・」

さつさからぶーぶー言つてゐるハヤテ
うん。きずいてないね

「お～い。なに寝ぼけたことこつてんの？現実を見なさい現実をー。
「ん？おおーー！」

ホントに世話がやける・・・・。

ま、そんなところが可愛いのだけどね。

いやー変な意味じやないよー！

そことのじりの誤解しないでね・・・・。

あれ？

誰に対して言つてんだ私は・・・・

ま、いつか。

で、話は戻り

なぜか果然といでいるハヤテと、いじけているショウ
みんなどしたの？

「予想と違う。」

「なんか違う。」

ああ。

そうゆうひとか。

「「何でこんなに子供っぽいんだ・・・・。」「

えええええ！――

そこですか？

普通、何でこんなに可愛いんだ。とか、もつとかっこいいのがよかつた。とかだよね？

そうだよね？

まあ、確かに、夜の尻尾で遊んでいるところを見ると子供っぽいかもしれないけどね。

ま、それはそれで可愛いじゃん？

男とかの見方って女と違つとかよく耳にするけど、まさかね。

「あ、だああああああああああああああああああああああああ

！？

いつたいなにが？

振り向くとそこには

大声で泣き叫ぶ。ハヤテの動物達がいた・・・・。

え？

見かけより精神年齢すごく低いんだ・・・・・

まさかの赤ちゃんレベル

もしくは幼稚園入ったて、いや、入りたてでもここまでひどくない
か・・・・

どうやって泣き止ませようか

「ほーら、よしよし、泣かないでね。お兄ちゃん困つてるよ～。」

「「え？」

いま、私言つたんじやありませんよ？
シユウがいつたんです。

あの無口で無愛想？なシユウが！！

以外だ。

い意外な包容力

そして、ハヤテの動物達は泣き止んだ。

意外な包容力（後書き）

遅くなつてスイマセンでした。

高校生活（番外編）

sideシェルティ

さてさて、話はもどり私がまだ普通の高校生だったころの話です。ちなみに今は高校一年生です。

「まじか・・・・・。」

私は、運動能力普通、知力は常に1～5位の間。なぜかスタイルがいい。けど、目が悪い。

自称凡人です。

そんなわたしが・・・・なぜ、

この学校で入学当初から騒がれているイケメン王子トップ5といわれる人たちの前で自己紹介をしなきゃならないんですかまあ、当たり前といつたら当たり前なんですね。

なぜかこのクラスに集まってるのですから

そして、人のことを知るために自己紹介。

これは、運命の悪戯というものですかね・・・・。

神様ってひどいな・・・・。

どういふことを言えばよいのでしょうか。

「じゃあ、次！月森夜華。」

「はい。私、月森夜華です。えっと・・・友達募集しています。・・・

・・・」

わあ。

めちゃめちゃ適当だつたけど大丈夫・・・な、分けないか。
くすくす言っている人がいるし

はあ。

「次！風早疾風。」

「はい。風早疾風です。ヨロシクな！」

女子からの黄色い悲鳴が聞こえてくるね。

さわやかだ

「次！栗山秀吾！」

5

自己紹介私より手抜いてる。

「次！ 竹刃 たけぎり 剣真 けんま」

「はい。我的名は竹切剣真。以後よろしく。」

じやつかん昔風の言い方

こいつは、優等生タイプ。眼鏡かけてます。

「次！赤坂勝正！」
あかさかかつまさ

「はい。俺、赤坂勝正！かつて呼んでいいぜー。」

うはあ

コツチもさわやかタイプ

可憐い女子にもてそう・・・

「次！ 隆盛院 虎！」

「はー。俺は隆盛院虎やー。こいよひしおつなー。」

はい。大阪弁のにぎやかタイプですね・・・。
あ、一これまでまだ長引くらしによー。

「次！梅崎院 うめざきいん 真上 まこと

「はい。梅崎院真です。以後よろしく。」

お、
お嬢様

みたいなタイプです。

しゃ
かれししれ

文庫本
新編
古今圖書集成

卷之三

ナガミ

てか、全然興味なさげにしている・・・・

あ、
そ
う
か
！

興味なさげにしていますけど、実は超気になるパターンとか？

うん。

「んじゃあ、早速実力調査テストだ。」

「えええええええー!?」

男子＆女子からのブリーディング

わたしはやがてハーフキーと心の中で思つてゐる。

たてで休育しなくていいんですね。
これがどれだけいいことか・・・

「文句言わない！配るからそれぞれもう一つたらばじめてくれ。それ
じゃあ配るわ〜〜」

さて、がんばりますか！

高校生活～番外編～（後書き）

長らくお待たせいたしました。

こつからひとまずワンピースシリーズ休憩で高校生シリーズが初まります。

あまり更新できないかもしませんが、どうぞお気になさらずに気長に待ってくださいませ・・・。

高校生～番外編～2話目

s.i.d.e 夜華

ん？「ほんなん楽勝ジャン！

うわあ。なんなのこれ簡単すぎーー！

中学生でも解けるわ

なんたつて中学の向き抜き打ちテスト並みの問題ですかね・・・。

「集めるぞーー！」

余裕余裕。

あれ？みんななんで落ち込んてるの？

おかしいでしょ？

中学の抜き打ちテスト並だよ？

「んじゃあ、今日は後自由にしていいぞーー

「「「「やつた」「」「」「」

ええええええー！？

なぜ？

おかしいよーいやだよー

ただでさえ私友達いないのに・・・。

初めてのクラスで私の知っている人いないからね・・・。

やばあ

へこんできた。

これからどうしよう・・・。

よし、ここは前向きにかんがえよう。

まず友達を作・・・・・り。

うん。無理

「おー」

どうじよ~

私は頭をかかえる

「おこつて。」

「つるわいな
だれだよ。」

「え・・・。」

栗山せんですか・・・。

うん。白亜櫻見てるんだ。

「おまえ。これから予定あるか?」

「え、あ、はい。ないです。」

いきなり何でこと聞いてくんの!」の人へ!~!
なに? なにかようでもあるのですか!~!

「おい。引くな。」

「あ、はい。」

私は無意識に引いていたようだ。

「んじゃあ。これからこっしょこかえらねえ?」

「えっと。自由時間とはいっても帰つたらだめなんじゃ……。」「今日もいつ学習時間ないけど?」

「あ、そうだったんですか。えっと。一緒に帰ります。帰る人居ないし……。」

あつぶね

断れなかつたし……つておつとじていた。

「じゃあ、校門で待つてるからな。」

「あ、はい。よろしくお願こします。」

よし、さつと用意して先回つしてやれ!

つて、もう居ない~!!

わたしはあわてて教科書をつめ、競歩で玄関まで行つた。
後は靴を履いて……

ドンッ

「あ、ごめんなさ……。」

「つて、な何するんだよ!。」

「ひいい。すいませんでした。本当にメンメンナサイ。」

いきなり胸倉をつかまれた。

いやだよ

こわいよ

なんでぶつかつただけなのに。
びくしきよ。

「女子に暴力をふるひとは紳士らしくあつませぬな

「竹切さん……。」

とつさに現れてくれた竹切さん

ホントに助かるよ~

ん?この名札三年つて書いてあるんですけど・・・。

ひえええええ

「あ?なんだこの坊主?喧嘩売つてんのか?あア?」

「言つているのがわかりませんか?丹森さんを解放しないこと紳士的ではないといつてしているのです。」

おお。

すごい、すごいよ~

竹切さん見直したよ!ほれるかも・・・

つてほど惚れっぽくないけどね。

「わや・・・。」

放り投げられた。

いた・・・くない!?

「つ・・・大丈夫ですか?」

「竹切さんこそ大丈夫ですか?」

私を受け止めてくれた。竹切さんとつさに降りつてついて聞いてしまった。

「おい!お前の名前の名前なんだ?」

「?」

「女のほうだよ~」

私！？

普通竹切さんのどこに住んでない？

「えっと・・・月森夜華です。」

「え？！まじでかー！やつべ～ボスにしばかれるーー夜華ちゃんごめんね。」このことはボスに言わないでお願いねー。

と、捨て台詞を残して去っていった六年
なんだつたんだ？

s.i.d.e 夜華

あ、やっぱ。

栗山わんまたしてたんだった。

急いで校門に人を避けながら行つた。

「お～い。月森先輩！」

こんどは何！？

後ろから声がしたので、止まつて後ろを振り向くと・・・

今度はちつこい一年がいた。

今日はなんなんだ。

なぜこんなについていないんだ。

「なに？」

一応返事はしておく。

「ちよつとコツチにきてください。」

「！？」

「大丈夫ですから。」

えええええ！？

なに？ なんなの？ こいつ！ ！

何したいの？

もうヤダよ～

何でこんなについてないの？

いつの間にやら校舎の裏側に来ていた。

「月森夜華先輩。」

「はいなんでしょう。」

一 ボケと

- 10 -

「ほくは、ずっとあなたのことを見ていました。好きです！付き合つて下さいーー！」

卷之三

断らなきや。・・・。

知りんし

「私はあなたの」とあまり知らないんです！スイマセン。付き合えません！」

「そり・・・ですか・・・・・。」

うわああ

なんかすごい罪悪感

弘文校門前

和田村元に送る
一
いさみに
力

そんでもつて

ついたとき」せわしく舞はんは・・・・・

居た！？

なぜ？

ええええ！？

「おそい。」

「はい。スマセン」

「まあ、いいけどよ。帰りどつちだ？」

「いひちです。」

私は右をさした。

「まじか～～～。反対じやんよお。」

「あ、すいません。」

「んじやあ。気をつけて帰れよな。」

「はい。ではわよひなら。」

「はいよ。」

・・・

私はこんなに栗山さんがおしゃべりだったとは知りませんでした。
そして、帰り道に・・・
一話のようなことがあり、げんざいにいたるわけですよ。
ああ。ながいながい。

更新遅れてスイマセンでした。

そしてなんとめちゃ短い！！

後誤字脱字が多い。

そこのところスルーしてもらえたとありがたいです・・・。

たいへんなことになりました。

s i d e シュルティ

そして次の日。

え? とか思わないでください。
めんどくさかつたんですよ。

はい。私はそういう性格ですから、なんも言わないでください。
んで、反乱終わつたらしいです。

え? だつて土煙とかたつてないし、
さてさて、今頃待ちはドンチャン騒ぎ・・・なので!

紛れ込んでちょっとお城に侵入しちゃいたいと思います。
もちろん、男は連れて行かない予定です。

ついてきそうだけどね・・・。

ま、いいとして。

夜になるまで待つて
んで、実行したいと思つてます。

さてさて。ここから、ここいら(ハヤテ、シュウ)をどう撒くか・
・

・・・・・っ。

いつも道理に過ごして魔法で瞬間移動でいく。
うん。ありきたり。

まあいいのさ

「ハヤテ、シュウ。これから私、魔法の訓練するから半径1キロメ
ートル以内に近寄らないでね。

かすり傷どころか一瞬で死ぬから

「

「「は、はい。」」

ちよつと殺氣こめて言つてみました
うとうん。びびつてゐるびびつて
さてと、からかいも済んだし（この「」の日常茶飯事なの）気を引
き締めて、
これ。

「速い羽」

これで背中に羽がつく

「加速する心」

これで、もう人の目には見えない。
神以外だけどね。

「フライ」

これで宙に浮き

「消えるからだ」

これで透明になります。

ちゃんと消えてるかな～！？

魔法で創った鏡でチェック。

どうやって作ったかは、想像にお任せします。
うんバツチリ。

よし。これで前ハヤテが練習していたのをやる

「ブースター
火炎」

太陽の熱を固定して力を倍にして敵に投げつける技。球体
ブリザード・ジャベリン
「槍氷」

空気中の水分を固定して力を倍にして敵に投げつける技。槍
サンダーカッター
「落雷」

体にある静電気を固定して力を倍にして敵を切る技。剣

「ハヤテブームラン
疾風」

自分名前付けたか・・・。風を固定して力を倍にしてブームランみたいに投げる。ブームラン

これらが一撃で一般人が死ぬ技です。
危ない技だねえ。

ここからさらに強い技があります。
え?ハヤテが考えたのってか?いいえ。私です。

「ブースターフレイヤー
火炎柱」

火炎の柱版で威力が格段に上がっている。

「ブリザード・シャーク
氷鮫」

氷々(ブリザード)の鮫版でこちらの威力が格段に上がっている。

「雷蛇」
サンダースネイク

落雷の蛇版でこちらも威力が格段に上がっている。

「疾風鳥」
ハヤテバード

疾風の鳥版でこちらも威力が格段に上がっている。

これらが一撃で人間が死ぬのです。

うわあ砂漠なのにもうわけ分からんことになっている・・・。

スルーしよう。

そして私の最終形態

「火炎龍」
カエンリュウ

火炎の龍です。

「氷鮫龍」
キョウガメリュウ

氷の龍です。

「雷蛇龍」
ハヤシヤリュウ

雷の龍です。

「疾風龍」
シッピュウリュウ

疾風の龍です。

「闇龍」
メテオ

闇の龍です。

「光龍」
「サンシャイン

光の龍です。

「神龍」
「シンロウ

龍の中の神です。

「破壊龍」
「ブレイク

破壊の龍です。

これらは敵に噛み付く技で光の速度の200倍、かすっただけでも普通の神殺せます。

光、月が最初に来る女神、神は生き残つてます。
うわあ。女神なの私つて、しかも美の・・・。
どうせなら戦いの女神の方があつてるよね・・・。
戦いの神しつかり！！

ん？下の（元）砂漠かい？もうわかるでしょ？
ぐちゃぐちゃだよ。

まあスルーで。

ちなみに私の能力も見なかつたことじょう・・・。
そのほうが世のためだよ・・・。
いざとなつたら魔王のなれるかもね・・・。

たいへんなりました。（後書き）

わたくして次はお城に忍び込んだことがあります。
どうなるのかな~

忍び込む準備

s.i.d.e シールティ

さてさて、いつの間にやら夜になつてたし。寝た振りして・・・あ、重大な事実発覚したんだつた。というか、みつけたんだつた。それは、臭いがあること。これじゃあシユウに見つかるよ~。

あ、フライで飛ぶか。うん。そうしよう。

「もう寝よう。」・・・と、シユウ

「ああ。」・・・とハヤテ

「今日は遅めに寝るよ。星がきれいだしね。」・・・と、私

「はあ?」

「え? だつて星がきれいだし? 大丈夫大丈夫。」

「あぶないっしょ・・・。」

「なぜ?」

「・・・。」

「まあ、そんなわけで私は早めに着替えるから。」(ちみない)でよ
ね。

「「は、はい。」

私は動きやすい黒の半袖半ズボンのできる限り肌を見せたバージョン。ズボンの方は股から10cmしかないし、上着はそでなし。それにチョッキ(迷彩色柄)をとりだした。

そして金縛りの魔法をかける

「硬くなるからだ。」

これで動かない。

そして

「消えるからだ。」

透明にして、着替える。

・・・着替え完了

よし。ちゃんと着替えできた。あとは後ろの髪の毛を銀のゴムで縛つて、前髪を銀のヘアピンで留めたらあとはこの魔法を解いて、次いでにアッチも解いつ。

「解除」
かいじょ

これで解けたかな？

「うおう。動ける。」・・・とハヤテ

「解けた」・・・ヒシュウ

「んじゃあ。私は早めに寝るね。」

「「おk。」「

おやすみ・・・。

ふわあ

はあ。今何時かな。

9時・・・。

うん。健康男子は寝て

私は後ろへ振り返るなぜならハヤテたちの後ろで寝たからだ。

「「ん？起きたのか？」」

「いねええええええええ。」

思わず叫んでしまった。

「「ん？なにがいねえんだ？」」

「なんでもない。」

寝ていなかつた。ンじゃあ何してたの？
まあいいか。

寝起きだしどうでもいいから。

「私は早く寝る方が好みだつたのに・・・まだ寝てないんだなんて・
・・。」

「「おやすみ。」」

「お、おやすみ。」

おお！効果抜群じゃん！

ハヤテは私のことがス・・・好きだからだけど、シュウはなんでかな？

ま、いつか。

さてと、忍び込みましょつか。

え～っとアラバスターにあるルフィたちがいるお城は・・・。

あつた！
！

遠い！！・！・！・！

え

ま、いつか。

「西」

「速い羽」
「加速する心」

「フライ」

よし。

飛んでいきますか。

速いよつですが、着きました。

しおりは、一応体隠してないのですよね。・・・

説小治政、内閣がん一新に

みたいな?

さつこく行動にうつむつと

忍び込む準備（後書き）

大変遅くなつてスイマセンでした。
でも、まあ

・・・。

「久しぶりにあとがきに登場だああ！」

「ショ、ショルティ・・・・・。」

「ん？ ああ。やつと自分の文才のなさにきずいたね～。更新遅いのはあなたのせいだよ？ 私は速く忍び込みたくてうずうずしてるのに・・・。」

「忍び込むのは犯罪なんじや・・・。」

「龜よ。」

「はい。」

「あなたがそうしたんじやうがアアー！ 龍よぶぞ、龍！ …。」「ひいいい。」めんなさい。できるだけ速く更新しますからあ。この通りです。」

「よし。許そう。」

てなわけで、更新はショルティちゃん

「ああ！？」

・・・ ショルティ様のおかげでだいぶ速くなりそうです。

「一言足りないよね？ ん？」

さつきからものすじい顔で見ているショルティ様。はい。そうです
忘れてました。

見捨てないでください。

「心が広い方ばかりだと思つたのでね～って、いいなさ～よ～…本当に心が広い方達ばかりなんだかんね！～！」

はい。わすれました。

心が広い読者様方どうか見捨てないでください～！
お願いします。

以上大変長いあとがきでした。

忍び込め……た？

s.i.d.eシHルティ

わつきから廊下らしきものを歩いているのだけれども……。
いやはや誰にも見つけられない。
とゆうか、人が通らない。

面白くね

「あれ……わつきもここ通り通ったよつな。」

この調子だからついたら奇跡だね奇跡。
いわゆる迷子さんですよ迷子。

知能上がったのになんでこんなのは直んじゃないんだ……。
転生の神のバカ……。
直せつての。

あ～もういいや

お風呂お借りしましょ。

このじるお風呂は入れてないからね。

え～っとお風呂は……うん。迷子さんには分からぬ。
よし。魔法使おう。目的地につける魔法なんてあるのかね?
ま、とりあえず言つてみましょ。

「月夜の光を我が道しるべになれ。」

的な?

おおー!

じつこうときの感はすばりじくへがつてゐるねー!
ちやんと光の道ができる

よし。進もう。

「ひつてけてつてけてつてけて」

なんとなく気晴らしに言つてみる。

お？ ついたかな？

んじや遠慮なく

「消えるからだ。」

さてさて、ここはつづくん。一応裸になつて、ぬいだ洋服は・・・犬なる魔法かけとくか。

どうして犬にしたかは・・・氣分的に？

今日はダックスにしてみよつと。

「ダックスになれ。」

おお～なつたなつた。

さてさてお風呂いただきますか。

ガラガラガラ

「きやあ！ なに？ 何が起きたの？」
「ええ～っつ？ 何で扉が勝手に開いたの？」
「どうした？ ナミさんびびちゃん。」「
どうしたんだナミ？」
「どうした？」
「どうしたんだ？」

：・上から

ナミ
ビビ

サンジ

ルフィ

ウソップ

ゾロ

チョッパーつていたつけ？

です。

おおあわてるあわてる。

あ、ナミたちがこいつにくる。

逃げる逃げる

「フライ」

ヒュー

逃げる

私は湯煙の間を煙のよつに縫つていく

「今声が・・・

「ええ！？」

あ、ルフィたちはナミの裸を見て撃沈してました。

ちつ

聞こえていたか・・・・・

まあいい。

解除するか。

あ、タオルくらい巻いてますからね。

「解除。お久しぶりナミさん。」

「！？ シエルティ。

「あの粉雪のシェルティ！？ええええええ！……！」

卷之三

ナミさん啞然

「黙れ、ハルジンの御腹町が二つはないので御腹町使わせていただけ

ますね。

「ハビト」

お、あつさり

今頃か

男性達よ・・・

「粉雪のシェルティってあの？」

「ほんとか！？」

卷之二十一

上から

ゾロ ルフィ サンジ

そしてウソップ、チョッパー

あ
ー

もういいや

お風呂いただいたし
え?ちゃんと洗ったし温まりましたよ?
なので。

「ダックス~。」

「わん!」

服でできたダックスフンドを呼び寄せて
どうやってできたのかは知らないけど

「かいじょ。」

服を着て。

「んじゃあ。部屋で待ってるからね~。」

去りました。

迷い猫になりかけた。

s.i.d.e ショルティ

さてさて、先にいっているといったけれども、
・・・やっぱりなつちゃんたんですよ

迷子に。

なんなんだこの迷子さんは。

なぜなるんだ〜〜〜

つて、最初は思つてましたよ。

今は、あきらめました。

魔法・・・使つたほうが良いですかね。
もうかれこれ一時間たつてますからね。
自分にほどほどあきれるなあ・・・。
まあしゃーない

なつちやつたんだから。

・・・。唱えよう

「月夜の光よ我の道しるべになれ。」

最初からこうすればよかつたな
なんかいろんなところが抜けてるな・・・。
ボケてきた?
いやいや。そんなんいやだ。
なつんてかんがえたらなんかすん〜〜豪華な扉についたやつたよ。
ここかな?

「はいっていいですか?」

扉を叩きながらいいつた。

「どうなたですか？」

「どの瓶から引くべきかな?」

「えっと・・・粉雪のシェルティです。」

「ほー、アーニー、おはよう。

۱۰۷

あれ?なんかみんな固まってる?特にウソツクなんかがもう石になつてるよ。

なんか、叫んでるやつがいる。

「...、
雪のシエルティちゃん～！？」

「うわさ通りの美しさだ・・・何でもお申し付けください。シェル

元々
か
ん

うわああ

めひかせ引くな・・・。

どんなのあるんかな。気になるな。
ま、どうでもいいから

気になつたことを一つ

「金髪の人。聞きたいことがあるのですが。」

「なんですか？」

うわあ、目が、目が

ハートだ・・・。

たぶんこれ、サンジ・・・

だよね

ま、そんなことはどうでもいいから

「（）に猫の耳がついた男と黒髪のやけに美人な男来ませんでした
か？」

「いい「パリーン。」」

なんか窓ガラス割れた。

なぜ？

「「シェルティイ！」」

ハヤテとシユウでした。

つて、なぜええええ？？？？？

「あ、お前らだな！シェルティチャンに気にかけてもらえているや
つらつてのは！」

うーん。

ま、無事？な、顔見られたし、いつか。

「帰るよーお前らー」

「「あ、はい。」「
「んじや～ね～またいつかどこか出でまつり。」

と、まあ撤収したわけですよ。

迷い猫になりかけた。（後書き）

次はシェルティちゃん
みんなにしかられるよ~

お説教のち波乱の予感！？

s.i.d.eシールティ

「つたぐ。なぜいつも一人で行くんだーお前はー。」

今、お説教を食らつてます。

私が悪いんだけれどもね、
正座で一時間もお説教つて・・・
う〜ん。

なんかなあ

こんだけやらせると、逆に反省できなによ・・・。

「聞いてるのか！？」

「はい。聞いています。」

ちなみにお説教してるのはハヤテです。
シユウは・・・なんか無視されています。

「わかつたなー！」

「はい。」

ふう。やつとおわった。

お説教長かつたな。

きつと顔はげつそりしていふことだらう。
なんか気分転換に・・・。

「ううう・・・。」

なぜか私は泣いてしまった。
自分でもビックリしている。

なんでこんなに涙がでるのか、と

お説教なんて日常茶飯事的にやらされてた私が

なぜ泣くのか、と、

もうこれに耐たらぬお
声を押し殺して泣く。

もちろん人目がないところだが・・・。

「な・・・んで・・・な・・・く・・・の?」

תְּלִימָדָה בְּבֵין כָּלֶבֶת וְבֵין כָּלֶבֶת

が、答えは返つて

きた

六六

「あ、俺？」

いきなり出てきた人にビックリして涙が止まらてしまつた。

「俺の名前は、竹切剣真。よろしく。」

「た、竹切さん！？」

「しつてるもなにも……。」

同じクラスダッタジャナナイデスカ。

なんていえません。

こんなところで個人情報漏らしてどうする。

「えつと、疾風と秀吾さがしてるのでですが・・・。」

「えつと・・・・はい。しっていますよ。」

「ほんとうですか！？」

「はい。」

「やつたああ！。」

「おいおい。ついもうしちまつたよ。
どうするよ。」

「ハヤテはともかくシユウは猫耳生えてるぞ？
ま、いつか。」

「じゃ、いきますか。」

「魔法で行きますんで、しつかりつかまってくださいね。」

「はい。」

〔テレポート
転送〕

つきました。

「大丈夫ですか？」

「ええ、なんとか。」

「「シエルティ！なんだその男は！！」」

「俺は・・・・つて疾風！？」

「よく見たら・・・剣真！？」

「久しづりだなあ」

と、抱きついていいる二人。

取り残された私とシユウ。

「おいシユウ！剣真だぞ！」

「ああ。」

え!? もしかしてこの「アレ男が秀吾さん! ?」

「アーティスト」

てこの猫豆は本物ですか？」

「體」
「體」

「ウル」

「はい。で、」のお方は？」

なごむねえ

つて、私！？

卷之三

「シェルティです。元・・・」

なぜ？ 元・・・のどこからなぜか口ふさがれた。

一人に合わせていただい。

いえいえそんなたなしで二、三ものしゃべり

せひ恩返しを

「これはドラマよく見る波乱の予感です！的なやつでしょつか……。
そうだったら……。
めんどくさいのはじめんだね。

ついでに書かないかも・・・(前書き)

更新遅れて申し訳ありませんでした!!

ついていけないかも・・・

Sideシェルテ1

「何か恩返しをさせてください。」

「え、つと・・・おんがえしとはいつても・・・。」

「べつにどうやあ中間にしつべださー。」

「
」

「『四』は、せひ何間にじてくたゞい

「なぜですか？」

何でいきなり入ってきたの？ シュウ、ハヤテ。いま、竹切さんとはなしてたんですけど……。ま、べつにいんですけどね

「二回以上俺のライバルを憎やしたくない！」

「え？？俺のライバルつて？？」

たたでさえ一人いのに人にじてどうするんだ

「…そうだ、そうだ。」

「「サヤジ」」「ジラフ」

「「すきだぞ（だが？）」」

基本的に会話には首を突っ込まない派ですが・・・。
え? 今私のこと好きだつて言つたよね?

ええええ！？

「それ本当? な、分けないとは思つてゐるけど……。」

「「本当」」

・・・。

即答でした。

ええええええ？

普通照れたりしませんか？

例えノリでぽろっと出たとしても真顔で即答つて・・・・・

「それじゃあ、ここのひとは月森夜華さんですか？あの鬼の番長がぞつこんだつたといへ。」

「え？」

鬼の・・・・・番長・・・・・？

しかもぞつこん？

てか、鬼の番長つて・・・・・。

なんかすごい大きい鬼のような顔で強い人ですか？

しかも名前が鬼島おにじま 鬼丸おにまるつていうすごい鬼っぽい名前の人ですか？

わたし・・・そんな人に・・・・・

てか鬼島さんがぞつこん・・・

までまでまで

何で見抜いたの？剣真さん。

「いやはや声を聞いたときからなんとなく予想がついていて、そして口を押された理由とあてまめたらな

となくわかりました。」

「え？？マジですか・・・まあわたしは月森夜華であつてますよ？」

「やつぱりですか！？」

うわああ

この人かん鋭い

し、

なんかすゞ～こわつきから田がきひきひめり光つてますけど・・・

しかも、シユウとハヤテの目線が痛い。

「あの～。別に仲間になつてもいいですよ？周りが神だらけでいいのなら。」

「ええ！いいですよ！私も神ですからー。」

「「「ええええええ！ー？？」」「」

な、な、なんの？

「なんですか？」

「そちらから言つのが筋でしょ？」「

「私は神」

「俺は戦い」

「俺は獣」

「そうですか～。みなさんあつてますねえ。そしてボクは気品の神です。」

「「「・・・地味だねえ」「」

「びどいな～」

笑つていらっしゃいますよ。氣品の神さんが
うわあ。

わたしより美の神あつてるんじやないかといつまどキレーな笑いか
たしますね。

私つて美の神であつてんの？

ついていけないかも・・・（後書き）

シェルティちゃん本来の可愛さがれかけてますよね
あんた世界一可愛いのに・・・。
このままオリキャラ増えるんだろうーなー
増えても見捨てないでくださいね

なんかやばこじになつてこぬよひや

s.i.d.e シールティ

あ、もう船に乗りこんだよ~
せめて美の神、いらしくならないとな~
服装は・・・
まあ近くに島あるしこで買つとして、
戦闘にそなえて武器も買つとくか、見かけだけだけども
シユウ、ハヤテ、剣真
つて・・・剣真さんだけ漢字だね。
ここつて漢字やめといた方がいいのでは?
あ、きいてみよ

「剣真さん。」

「はい? なんでしょう。」

「ここでの名前を考えてください。じゃないとなんか違和感があるので。」

「わかりました・・・じゃあ分かりやすく「ケン」でいいでしょう。」

「いいんじゃないですか?」

「ありがとうございます。」

ケンか・・・

そのまんまだね

ま、いつか

あれ? ケンって神だから聖獣とかいるのでは?

額にルビーはまつてる

つてことは額に何か入ってるのかな?

指輪は・・・おおーー！

すごいな・・・・

山吹の花だ・・

花言葉は「気品」

そのまんま～

「あの～。」

「「「なに？（んどしょう）（だ？）（だ？）」「」」

「ケンの聖獣って何？」

「え～っと出した方が早いですね。両方出しますか？」

「「「もううん！」「」」

「我の召喚する。我を守りし聖獣よ、ありわれよー。」

やけにかつこいせりふですね～
お？

私の髪の色と同じ白い狼、目は金色。整へ一辺はあるよね～

空に浮いてて助かった。

もう一匹は、額に入つてた方だね。

幻獣のフニックス

まつかつか。触ると燃えそう
でつか。一辺あるよね～

「狼の方が銀。鳥のほうは二クス。」

「「「かつこい（つけ）」「」「」」

「戻れ。」

ええええ？？？

もどしちゃうの？

ま、邪魔だからこいけどね～！

「で、この街でいつたん買い物したいから。」

ପ୍ରକାଶକ

1

即答？

h
?

あ、なんか空から降ってくる
このパターンもうなれたわ
またなんかクラスメイトがくるんでしょう?

「あ、転生の神だ！」

あ、ほんとだ
ひさしごりだね

でもこの船に落ちてこられたくないから

「フライ」

「アーティスト、？」

受け取りに行きマース

「よつとお。」

「はあはあはあ・・・・。」

わああ

腹裂けてる
血がやっぱ
ま直すか

「フルギュア
治療」

ん。

なおった

「とにかく、回復してから聞くか。」

私は転生の神とともに船に降りた。

武器賣こな・・・・・

s.i.d.eシHルティ

「おい！何でこんなに血まみれなんだ？」

「何かあつたようですね・・・。」

「戦か？」

「さあ・・・・。」

とつあえず今は寝てるけど・・・・。

起きたら聞いてみよう

もし戦闘だつたら大変だしなア
勝てるかわかんないし・・・。

武器は必要だよね

「もし戦闘だつたら勝てるかわかんないし、これから行く先が機で
戦いに巻き込まれるかもしけな い・・・。だから早めに武
器を買つときたいのだけれども・・・。」

「もし買ひに行くのなら誰かここで転生の神の見張りをしなければ
ならないですね。」

「俺がやろうか？」

「いいの？シユウ・・・。」

「まけせとけ。俺の武器は鞭でいい。」

「わかった。もづすぐ着く島で探してみよつ」

シユウ・・・

鞭つて言つてもいろいろあるんだけれども・・・
まあ一番攻撃性に優れているものにしてよつ。
とか話していくうちにつきまして、

とにかく上陸。

「んじゃあシユウ。行って来るね。」

「ああ。」

「留守を頼みますぞ」・・・ケン

「敵が来たら叫ぶんだぞ?」・・・シユウ

「倒せる。」

とまあ。

挨拶も終えて

いつ〜

「早くつきたいんで私たちにはね付けて加速する魔法使つかひひや
んとついてきてね、後早くなれてね」

「は、はい」

「速い羽 加速する心

「なれたらおいかけてきてね」

「」解

ひ、いきますか。

つきました。

え？ 時間？

んなもん。

作者の権力で何とかなるワイ！
んで、今、店を探しています。

「どこかなあ？」

「わたくし」

「あ、あーじやないか?」

え

裏路地の一角(?)

6

世はも不思議な「武器」

いせいせいせい

「」

興味そそられるやないカーカ

「いえ、危険です。」「なぜとこいつときめくつてね?」「まあ。」「」

お
お。

卷之二十一

「はいなー。」

あ、乗つてくれた。

はいました。おどろおどろしい店に

「きょうは3人買い。」

買
い
?

え？ 買われるの？

もしくは買われるの?

「私は剣を。」

でつかい両手剣

なんか緑色なんだけれど……

しかも柄の端に緑の玉みたいな

「んじゃあ俺はこの銃で、」

両手銃です。なんか小型の銃二丁で、持つところに青色の宝石っぽいものがはまっている。

「わたしは・・・。」

う
ん

鞭もいいけど・・・・棍棒もなあいいよなあ・・・あ、でもこには女の子らしく杖で行きますか。

おしのめに

なんか刃黒い槍の端に白い玉がついたの

「あれと、あれと、あれぐださー！」

「あいよ。私とゲームでかつたらただでやろう。ただし負けたら1

「0年闇で働いてせひこのゲームならヤリマセン。」

「おまかせ」

「これは・・・ゲームを強制的にやらせたい感じですね
よし。かつても負けてもコツチにメリットがあるよ！」
といつも

「んじゃあ。負けたら私との国で一番強いものと勝負します。そ
してそのものとも負けたら、あなたに忠誠を誓いましょう。どうで
すか？」
「いいよ」

よし。どうせ私は能力使えば無敵に近いからねw

わて、ゲームの始まりダア！――！――！

ござ、勝負！――

side シュルティ

「では、ゲームの説明をしよう。」

「はいはい。お願いします。」

ふふふ。

何が来ようたって私は勝つぞ！

なんたつて初めに身体能力とかいろいろ5000倍にしてもらつた
からね。

当然カンも・・・

あ、そうでした。カンで迷つたのでした。アラバスタのところにあつ
た城で・・・

どおしょづ：

顔が真っ青になつた。

「おい、だいじょうぶか？」

「ボクと変わりましょうか？」

「いい。大丈夫」

たぶんだけど・・・・

うん。私はできる私はできる。
よし・・・。

「言つていいかい？」

「おねがいします。」

「ルールは簡単さ、さいころの数字が奇数か偶数ができる。」

「はあ。わかりました。」

「ではやるよ。」

敵は、緑色の湯飲みみたいなものと、そこから一つを取り出しおもむろにさしころを手湯飲みに入れ数回まわしてから

「セヒビツヤだ。」

と、言った。

うーん。カンで奇数

「奇数。」

「んじやああたしは偶数だね。答えを見てみよつか。」

「「奇数だね」」

おっしゃ～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「しゃ～ないね～。私の負けだ。ほら、武器を持ってこきな。」

「「「ありがとう。」」」

こうして私のゲームは無事、勝つたのであった。

「おいおい。お前達。」

「なんでしょう？」

「その武器達の名前、知りたくないかい？」

「「「はー。」」」

すんごい気になる。

なんのだろ！」私の黒く美しい刃に赤い大きな薔薇が彫つてある不思議な杖のような刀のようなものは……。

「この薙刀の様なものは、「**悪魔杖**」という。そして、この黒い刃の部分は切ったところから滅びていくから氣をつけな。この玉は……。
・・しらん。」

わああ。

めっさ危ないやんけ！！

どうしてくれんの？間違えて逝つたらどうすんなの？

うひゃー

「そしてこの一丁の銃。これは魔力……とか言つものが玉になるらしい。名前は「妖精」^{フエアリー}」

あ、シユウの武器の鞭追加しどこ。

「あの、武器もひとつ追加したい物があるのですがよろしいですか？」

「うへん。ま、いいじゃね。」

よし。

「ありがとうございます。」

「いやいや。もうこの店は売つちまつたからね、ここにある防具も持つていっていいよ。」

「え？・・・・・ありがとうございます。」

今ポロリと売つてしまつたつて言つたよね？
つてことは何？ホントはあんな賭けしなくともただでもうれました

的なの？

いやいや。ありえんな。

ま、もらえたし・・・。

で、ショウの鞭ざつじょつ・・・。

これ、勝負！（後書き）

いや～

更新遅くなってしまってスイマセンでした。

なんかすげえ

sideシールティ

と、いうわけで

わたしは防具＆鞭をさがしています・・・・・・つてもなかなか見つかりません

「あの、やつぱり先に武器の説明してください。」

「ええの？」

「はい。聞いた後にじっくり選びます。」

そのほうが気がらくだからね
やつぱり先に聞いたほうがいいよね～

「ここの両手剣は「聖劍」この刀は癒したい相手には癒しを^{ホーリースナイフ}え、新で申しいい相手には滅びを[』]える・・・まあ使う人によつては悪魔と化す化け物のような刀じゃな。ま、皆そうじやガの。」

「『まじですか・・・。』」

「ホントじゃ？」

うつわああ

この武器だけで世界政府倒せるんじゃないの？
ん？

なんか今奥の方からなんか來た

「すいません。奥いつてきていいでですか？」

「いいが？」

「ありがとうござります。」

わたしは許可をもらひ奥へ進む

「あ・・・・・。」

見つけた。

私の防具

見かけはただの私が着ている物と同じ粉雪柄のマントだけど、なんかこうまとうオーラが違つ、光り輝いているし、すくなく神々しい

「これ、もらつていいですか?」

「これか?でもこれは持ち主を選ぶぞ?」

「いいですよ。」

「失敗したらのろいがかかるぞ?」

「なんかこれは懐かしい感じがするから・・・大丈夫です。
「では着てみる?そのマントの上からじゃ、」エンド「エンジェルフエザ」
マントの辿ってきたものも受け継いでマントそのものになってくれるんじや。」

「はい。」

この人どこまで知っているんだ?

かえつて怖いぞ?

私はなんか複雑な気分になりながらマントを着る

キュイイイイイイイイイイ

「おお!成功じや。」

「え?」

うーん。

実感ないなあ
ま、いつか

「ハヤテたちは？」

「俺たちは要らない。気に入ったものがいいから。」

「そり・・・。」

残念ね

ここではただでもらえるのに
ちつ

「シユウのはじびりまするへ。」

「これでよくね？」

ハヤテが持つたのはなんとうかす、「」ことげとげした先端に毒のオーラを纏っている毒々しいもの

「これは！よく見つけたの！」これはこの店の中で一番殺傷能力が高い「毒蛇」じゃ、この鞭で叩かれたものはすべて麻痺し、力の強いものでも三日後に死ぬといわれてある。

「うわあ。」「」

ええええ

こんなもんわたすの？

ま、いつか

シユウなら何とかしそうだ。

「これお願いします。」

「あいよ。後これ渡しとくよ。」「ればビブルカード。」の店に来た
きやこれの進む方向にこぎな。

「あつがといわせこます。」

れへと、

「帰るよー。」

「「おーいー。」」

私たちは買に物を済ませシユウの元へ帰った。

なんかすげえ（後書き）

更新遅くなつてスマセンでした。

ソラシドン

side シュルティ

まあいろんなことがありまして無事私たちの乗っていた船につきました。

でもさ

なぜか転生の神の怪我が治つていて……

はあ？

「何で転生の神が直つてんの？」

「あの傷つて演技だつたらしいから。」

「え？」

演技ですとおおおー？

聞いてませんぞー！

「いやいやだましていいやめんな。」
「（めんじやなつての……）。」

私は散々嘘つぽこのつこつこするけど体に關しては嘘はつこつこない
！……井に傷ーー！

「あ、やがりや。」

「なに？』

私が多少苛ついた声で答える。

「今回の君のミッション。」

「ミッシュン? なんじや そつや。」

ミッシュンなんて聞いてないぞ?
大体何のミッシュンなんだよボケ

「心の声が駄々漏れだぞ。まあいい。まず、君達は「」で生きるためには君達にかかる全員にミッシュンが『えりれる。そのミッシュンを達成したら次の世界に飛ばされ、また、ミッシュンを受かる。と、まあこんなかんじだ。』

「で? どんなミッシュン?」

「「」の世界のために貢献せよ。」

ミッシュンの範囲「...!」

「で、どうすればミッシュン完了?」

「だから、「」そんなこと聞いてんじやねえよ。やり方教える。」

転生の神の胸倉を掴んで言ひ。

「えつと・・・えーと・・・本来は死ぬはずだったものを少し長生きさせるとか?」

「それ貢献につながんの?」

「分からん。」

私は問答無用で神様を蹴った。

「私は的確な答えを求めてるの。分かる?」

「分かつた分かつた。んじやあ一番手つ取り早い方法。
「なに?」

変なことだつたら承知しないからね。

「海賊を全員皆殺しにする。」

「それワンピース終わるー終わつたやつーー。」

「えー。」

「えー。ひじやないーー。」

「しようがないな。んじゃあ今のあり方を変えん。」

「どうやつて?」

「こりこりな」とやつて・・・・で、冗談冗談。」

私がちよつときつこ顔で睨んだらあいつ引いた。

「もとの世界にあつたものをはやしらせるとか?」

「あ、それいいね。で、例えばどんなもの?」

「車とか・・・・。」

「あるわ!ーー。」

「じゃあ郷土料理とか?」

「ありそつなんだけど。」

「じゃあ、シャーペンとか?」

「どうやつて云える?」

「・・・・。」

あ、神様黙つた。

「やーは、はぐらかすなあああああああ。」

神様は風のよつて雲の中に消えた。

「やーは、はぐらかすなああああああ。」

私は空に向かって大声で叫んだ。

神様に伝わるようだ。

お、遅くなつてスマセンでした。

HPLローグ

s.i.d.eシールティ

ちつ、転生の神のやつ逃げやがった。

「ド、どうするんですか？」

問題はそこなんだろね。

「ま、とりあえず私たちが賞金首になつて将来自殺するとか？もし
くは麦わらか遺族団に殺されたつてのも良いね。」

「・・・・・か遺族団じゃなくて海族団だ。」

冷静に直されたよ。

「とりあえず私は賞金首だし、もう人がいなくなつて誰もすまなく
なつて獣もすんديない島に行って、派手にこの世から消した後に
私のちからで、もとに戻すつてのも良こよね。うん。そうしよう。」

てなかんじで、まあそんな感じのところにいつて派手に消し、私た
ちは使命を全うしたわけですよ。

・・・・・なんで、なんで、なんでだ！！！

使命があわつたのにちがつせかいにいかないいいいいいいいい
いいいい！！！！！！！！！！

ま、そんなかんじの私達。こんななんでも、少しほ成長したかな？

ハルローゲ（後書き）

「こんなで終わってしまったができれば続編ぐらしかきたいな」と思つておりますので・・・え?もう書くなつて?そんなこといわないで(トト)

では、またいつか会えることを楽しみにしておまかーわよなひ――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3234n/>

ONE PIECEの世界で生きて行きます！！

2011年3月19日21時51分発行